

せい か ほう まさ
星 火 方 正

ほうまさ
～燎原の火は方正から～

満洲泰阜村分村史についての教科書を！ 安富 歩
満蒙開拓団の女性たち—ドイツ追放女性同盟での経験を通して— フックス 真理子
義勇隊に唯一の現地隊があった ご存知でしたか 末広 一郎
「満蒙開拓平和記念館」館長就任に当たって 寺沢 秀文
昭和天皇の戦争責任と日本人の加害者責任意識の欠如 野崎 朋子
私も日本国家から棄民された！—イラクの人質になった私たち— 長谷川 捷一
日本方正総商会設立さる ～活躍が期待される方正出身の起業家たち～ 大類 善啓



葫蘆島に立つ日本人送還記念碑

戦後、多くの日本人たちが中国東北地方から引揚げてきた。その大半が葫蘆島からだ。当時はここだけがまだ国民政府軍下にあった。その後、新たに立った記念碑である。

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正^{ほうまさ}友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第 26 号）～燎原の火は方正から～

目次

満洲泰阜村分村史についての教科書を！ —「なぜ祖先が生き地獄に堕ちたのか」を子どもたちに探求してほしい—	安富 歩	1
満蒙開拓団の女性たち —ドイツ追放女性同盟での経験を通して—	フックス 真理子	5
.....		
義勇隊に唯一の現地隊があった ご存知でしたか	末広 一郎	8
満蒙開拓青少年義勇軍「満洲現地隊・高田中隊」	高橋 健男	13
.....		
「満蒙開拓平和記念館」館長就任に当たって	寺沢 秀文	17
ドラマ『どこにもない国』の放送実現と葫蘆島からの引き揚げ	〃	21
満蒙開拓平和記念館の感想	水越 景人	26
満蒙開拓平和記念館を訪れて	梯 頼子	27
.....		
昭和天皇の戦争責任と日本人の加害者責任意識の欠如	野崎 朋子	28
.....		
方正県城西日本軍飛行場の顛末	曹 松先 石 金楷	35
方正县城西侵华日军机场建设始末	同上中文原稿	37

私も日本国家から棄民された！ —中東のクウェートでイラクの人質になった私たち—	長谷川 捷一	39
「文化大革命」をどうとらえたらいいのか？ —文革時期、新聞記者として北京に滞在していた私—	秋岡 家榮	45
自然エネルギーという言葉に騙されないで！ —山田征著『ご存知ですか、自然エネルギーのホントのこと』を読んで—	江藤 昌美	48
.....		
対立・侵略・追放・和解 ～ドイツ・ポーランド関係史から考える東アジアの隣国関係～（上）	木村護郎 クリストフ	49
.....		
沖縄を侵略したのは大和（薩摩藩）とアメリカだ！ ～進貢使の足跡を辿る3泊4日の旅をして思う～	友寄 貞丸	55
.....		
日本方正総商会設立さる～活躍が期待される方正出身の起業家たち～	大類 善啓	57
日本方正総商会大阪分会正式に成立	関西華文時報	59
.....		
関連記事 「通州事件」遺族の思い —「事実だけ知ってほしい」「祖父の死を利用しないで」	東京新聞	60
過ちを繰り返さない日本に	藤原 敏子	62
.....		
「方正友好交流の会」へのお誘い		63
報告 書籍案内を兼ねた編集後記	大類 善啓	64

満洲泰阜村分村史についての教科書を！

—「なぜ祖先が生き地獄に堕ちたのか」を子どもたちに探求してほしい—

安富 歩

泰阜村からは、277戸1174人が満蒙開拓団として入植し、1945年8月9日時点で984人が大八浪の分村に在籍した。そのうち、死者612人、未帰還者57人、不明者50人という被害を出し、無事に引き揚げた人は265人に過ぎなかった。特に10歳以下の子どもの大半は、帰還し得なかった。

なぜ長野の人たちが中国の東北に行ったのか？

長野県の山村にいたはずの彼らは、一体、なぜ中国東北部の平原にいて、文字通りの生き地獄に堕ちることになったのであろうか。

この一つの問いに応えようとすると、巨大で複雑な問いの連鎖に巻き込まれる。なぜ彼らがそんなところに居たのか、といえば、それは彼らがそこに入植したからである。ではなぜそこに入植したのかというと、それは日本の国策であった満蒙開拓の「二十年百万戸送出計画」のためである。ではなぜそのような国策が策定されたのか、となると、これは既にかなり複雑な問題を孕む。

この計画は関東軍の策定した「満洲農業移民百万戸移住計画」がもとになっているが、百万戸というのは、建国二十年後の満洲国の人口を五千万人と見て、その一割を日本人が占めるべきだ、という考えに基づくとされる。

いいかげんな満洲移民計画

しかし、そもそも五千万人という見積もりになんの根拠もなかった。実際、後の国勢調査によって、1940年代前半の段階で人口は既に四千五百万人を越えていたことが判明している（注1）。また、なぜ日本人が一割必要なのかは、なんの説明もない。

この杜撰な計画に対して、時の大蔵大臣の高橋是清が反対していたが、二・二六事件によって高橋が暗殺されたため、軍部の発言力が増して国策化された、とされる。しかし、この計画は陸軍を必ずしも利するわけではなく、その内部にも計画の杜撰さを懸念した人々はいた。なぜ陸軍は合理的な判断力を失ってしまったのだろうか。

それ以上に疑問なのは、送り出し側の事情である。最大の送り出し県となったのは長野県であるが、その理由として、大恐慌以降の養蚕の極度の不振や1933年の「教員赤化事件」への反動といったことが挙げられるが、既に指摘されているように、実際に移民の送出が本格化した1939年ごろには、戦争景気と天竜川のダム建設によって労働力不足が生じていた。長野と並ぶ送出地であった山形県では、移民を抑制し始めたのに対し、長野県はこれらの要因を乗り越えてまで移民を送り出した。なぜそのような無理が

実行されたのか、蘭信三「序 本書刊行にあたって」（『満洲泰阜分村』不二出版、2007年、所収。）が適切に指摘するように、その理由はわからないままである。

<命より「立場」が大切だ>という理念

これらの「なぜ」に応えるには、近代日本社会を支配する作動原理のようなものを解明する必要がある。私はこれを命よりも立場を大切だと考える、「立場主義」という理念によるのではないかと考えている。日本では、立場には役が付随し、役を果たしていれば立場が守られるが、できなければ役立たずとなり、立場を喪う。日本人は立場を喪うことを極度に恐れている。これは近世を支配した家というシステムが近代に入って動揺し、そのなかから析出して来たものと考えられる。

もちろん近世社会が家制度のみによって規定されていたわけでもないが、それでも家という観念が強い支配力を持っていたことは否定し得ない。勝俣鎮夫『中世社会の基層をさぐる』（山川出版社、2011年）が示したように、中世日本の人々が、「家」を生命体として認識していたのであれば、それが社会の基礎的な単位として現実に作動していたことも、十分に納得できる。そして、高木昭作『日本近代国家史の研究』（岩波書店、1990年）が主張したように、幕藩体制の基底が、家々に割り振られた軍役にあるとすれば、近代になって導入された徴兵制は、それを痛撃したことになる。

家主義が解体し「立場主義」への移行

私は、この衝撃によって「家主義」が解体し始めて、「個人主義」ではなく、「立場主義」へと移行していったのではないかと考えている。というのも、尾藤正英の指摘するように、家々に課せられた「役」の体系として社会秩序が形成され、これがそれ以降の日本社会の基盤となっているからである。尾藤はこのことをもって「日本史上の近代は、十六世紀の近世国家の成立とともに始まった」と主張する。（注2）

私は、この「役の体系」の枠内で、明治維新から高度成長期にかけて、家が徐々に崩壊してゆき、その代わりに役を担うものとして立場が析出していったのではないかと見る。この観点からすれば今の日本は、個人主義社会なのではなく、立場主義社会であり、近世において個人が家の要素であったように、近代では立場が要素となっている、ということになる。そしておそらく現代は、この「役の大系」そのものが、立場と共に崩壊しつつあり、そのことが日本社会の動揺の原因ではないかと考えている。

この観点から、上記の「なぜ」を説明できるのではないかと、というのが現時点での仮説である。家から立場への移行は、都市エリート層から始まっており、アジア太平洋戦争はその過程が一気に進んだ時期だと考えられる。立場にふさわしい振る舞いや、立場上やむを得ない判断というものを過度に積み重ねていったとき、自分自身というものが失われて行き、極度に無責任なことを、責任をもって真摯に実行する、という倒錯した事態が発生しうる。この時期の日本のエリートの集団的な判断の誤りはここに起因するのではあるまいか。

誰も止められない悲劇への暴走

一方、郷村地帯は家が機能しており、それから構成される村もまた、強固な構造を維持していた。これらの条件が重なって、暴走過程がひとたび始めると、誰にも止められなくなってしまう。満蒙開拓の悲劇は、このような過程の一部であり、この観点から当時の長野県の状況を精査することで、悲劇を引き起こした特殊な条件を解明できるのではないかと考えている。もちろんその条件は、「原因」ではなく、「きっかけ」に過ぎないのであるが、ここを明らかにすることで、悲劇を理解する道が開かれる。

これ以外にも、泰阜村の人々がなぜあの場所にいたのか、という問いに付随して、次々と大きな問題が生じる。そもそもなぜ「満洲国」などというものがあったのか、それを生み出した満洲事変はなぜ起きたのか、それを引き起こした関東軍などというものがあるのか、首謀者である石原莞爾らの軍人はなぜそんな無謀なことを考え、実行したのか、国際連盟はなぜ事態の進行を阻止できなかったのか、張学良政権をはじめとする中国側はなぜ関東軍を撃退し得なかったのか、といったさまざまな「なぜ」に答える必要がある。

これらの問題の一部については既に、安富歩・深尾葉子編『「満洲」の成立——森林の消尽と近代空間の形成』（名古屋大学出版会、2009年）や安富歩『満洲暴走 隠された構造——大豆・満鉄・総力戦』（角川新書、2015）といった作品で答える試みを行なった。とはいえ、これらの全ての問いに、十全に答えることは、原理的に不可能である。というのも、ひとつの「なぜ」に答えることは、多数の「なぜ」を生み出してしまうからである。しかし私はそれでも、できるかぎり、力を尽くして、この「なぜ」の連鎖に答えていきたいと考える。

その際、どの「なぜ」にどこまで答えれば良いのか、という問題が生じる。これを学術的な観点から適切に設定することはできない。なぜなら、学術的には、より多くの「なぜ」により詳細かつ正確に答えるべきだということになり、私の研究資源をどのように配分すべきかを教えてくれる基準がないからである。

研究は誰のためにあるのか？

そこで私は、この研究はそもそも、誰のために行うべきなのか、を考えることにした。そしてそれは、泰阜村の人々、特に将来を担う子どもたち以外には、考えられない、と結論した。それゆえ私は、泰阜村の小学校中学校の児童生徒が「自分たちの村の人々が、なぜ生き地獄に堕ちたのか」という問いを切実に立てたときに、それに納得のできる説明を与えられるかどうか、をこの研究を進める上での指針とすることにしたのである。

それゆえこの研究は、その成果を常に彼らの理解できる形にして報告し、総合学習の時間などを利用して説明し、疑問を発してもらい、それに答えるために私が調査研究を進める、という形をとる。そしてできれば、子どもたちが自らの手でこの疑問に答える、という動きが生じてほしいと願っている。その場合には私は研究の補助者となって、彼らの探求を支援することで、より有効に研究を推進できることになるはずである。

そして最終的に、できるならば子どもたち自らの手で、泰阜村の悲劇を理解するための教科書を生み出したい、と考えている。もしそのような作品を生み出すことができるなら、それは、必ずや、深い普遍性を備えたものとなっているはずである。この教科書は、彼らの先祖先達が意味のわからない生き地獄に堕ちたにもかかわらず、みずからが今ここに生きていることの意味、これからどのように生きていくべきか、を理解する手がかりとなるであろう。

もちろん私は、この研究の過程で生み出される成果を専門的な研究者が納得するような論文や学術書の形でも発表するつもりである。そして、このような実験的な研究推進の過程そのものもまた、さまざまな形で報告する予定である。

このような観点から行う研究は、歴史研究はだれのために、なんのために行われるのか、という問題に対するひとつの回答を示すはずである。そして更に、この実践の過程そのものが、日本中の子どもたちの教育に新しい光を当て、その仕組み自体が研究の成果となると期待される。

(注1) 安富歩・兼橋正人「1940年国勢調査にみる満洲国の実相」『アジア経済 2011 2 Vol. 52 No. 2』第52巻 第2号(2011. 2.)、2-22.; 山中峰央「「満洲国」人口統計の推計」『東京経大会誌』第245号、167-190頁、2005

(注2) 尾藤正英『江戸時代とはなにか——日本市場の近世と近代』現代岩波文庫、2006年; 『日本文化の歴史』岩波新書、2000年。引用は後者、147頁。)

(やすとみ・あゆみ: 1963年大阪府生まれ。東京大学東洋文化研究所教授。『「満洲国」の金融』で第40回日経・経済図書文化賞受賞。『「満洲」の成立』深尾葉子共編・名古屋大学出版会、『原発危機と「東大話法」—傍観者の論理・欺瞞の言語』など著書多数)



<安富先生とは昨年の11月、泰阜村と方正県との友好提携20周年記念式典で久しぶりにお会いした。その時の写真である。左、安富先生、右、大類、撮影は寺沢秀文氏>

満蒙開拓団の女性たち

—ドイツ追放女性同盟での経験を通して—

フックス 真理子

偶然から始まった日独の比較

2017年9月30日、「満蒙開拓団の女性たち—戦中・戦後・現在」という演題で、ドイツ、ヘルムシュテット市で講演を行った。第二次世界大戦後、ドイツの占領地だった東欧地域から、敗戦によって追放され、引き揚げてきた女性たちの会のセミナーに招かれたのだ。これら引き揚げドイツ人全体の数は、1500万人以上と言われており、その中には、ナチス・ドイツの時代に移住した人々のほかに、200年以上前からそれぞれの事情で移民したドイツ人の子孫も数多く含まれる。また、避難する途上命を落とした人々は、50万人から200万人にもものぼると推定されていて、「追放・引き揚げ」自体、歴史上の大きな出来事であったと言えるだろう。もっとも、私自身は、この分野の研究者でもなく、まったくの偶然から引き受けたことだったので、準備に際してはかなり大変な思いをしたけれど、貴重な経験となった。

実は私は、ドイツに来る直前、満蒙開拓団が戦後引き揚げてきて作った山梨県南巨摩郡の開拓村に、ご縁があって8年ほど住んでいた。1970年代後半から1980年代前半にかけてのことである。その住民たちは、結局農業だけでは食べていけなくなり、ほとんど皆下山して廃村になっていたのだが、その中の一軒家にタダで住まわせてもらっていた。そのころ、元満蒙開拓団の人たちと話す機会も多々あって、満州での生活や、当時ちょうど話題になっていた中国残留孤児について彼らの思いを聞いていたこともあり、この問題は長い間、私の頭を離れなかった。今回、親しい友人のヘルガが、シンポジウムの発表で一つ欠員が出たところに私を推薦してくれ、私がこのテーマを選んだのである。彼女は、女性としては当時珍しかったデュッセルドルフの州裁判所検事長としてキャリアを積んだ。しかし彼女自身も、戦時中に父の仕事の関係で移住したチェコ東部から、3人のこどもたちだけで苦労して引き揚げてきた身であり、80歳を越す今でも、この同盟のために精力的な活動を行っている。

なぜ歴史を学ぼうとしないのか

講演では、満蒙開拓団の歴史を概説した後、特に日本の女性の性被害について報告、中国残留孤児をめぐる問題にも触れた。また、なぜこのような欺瞞に満ちた国策が推し進められたのか、そこで果たした教育の役割とは何かということについて述べ、昨今の福島原発事故を見るなら、それが満蒙開拓団の歴史と既視感を伴いながら重なることも指摘した。

学者・政治家・官僚からなる、いわゆる原子カムラと言われる利権構造、原発を作れば、その市町村が補助金をもらえる制度、ヒロシマ・ナガサキの被害を経験した国にもかかわらず、文部省主導で行われた原子力の平和利用というまやかしの教育、そして、いったん原子力発電所の事故が起きたら、国は自己の責任を問われることもなく、そこに住む住民たちはあっという間に棄民とされる事実、しかも、国民の大半はその重大な問題すら、オリンピックなど他の出来事に目をそらされて忘れていく。この状況は、まさに満蒙開拓団という国策の破綻とその後の政府の無責任な態度、冷淡な国民の姿そのものではないか。ドイツこそ、福島事故によって、2022年までの脱原発を国として決定したというのに。

なぜ日本では、歴史に学べないのか。講演では、その要因として、歴史を批判的に捉えようとする学校教育を挙げた。その一方、ドイツでは、学校教育全般を通して、「あの戦争を始めたあやまちに学び、二度とあのような歴史を繰り返してはならない」という社会の明確な意志が感じられる。ドイツの文教行政は、州独立だが、私の居住するノルトラ

イン・ヴェストファーレン州では、たとえばドイツ語という教科の学習指導要領の目標は、「たとえ周囲の全員がイエスと言っても、自分はノーと言える態度を養う」というものである。もちろん、これはあの戦争に対する反省に立ったものにほかならない。このような、自分の正しいと思うことをコミュニケーションを通して積極的に述べ、きちんと自分の判断で自己決定し、行動できる人間を育てるということは、すべての教科を通しての教育目標となっている。その態度を欠く日本の学校教育では、満蒙開拓団についても第二次世界大戦における日本の戦争責任についても、ごくわずかに教科としての歴史の授業の中で、年表的な歴史を、ただの暗記知識として他人事のように学ぶだけだ。

ドイツでも傷ついた女性たち

さて、ヘルムシュテットのセミナーでは、皆非常に熱心に耳を傾けてくれて、講演後は、質問攻めだった。たまたま私の前の発表者が、ドナウ川周辺地域から帰還した女性たちの性被害について報告していたので、そのことともリンクして、場所は違えど、いかに戦争が女性たちに傷を負わせたか、よく分る展開となった。



セミナー室の様子



左からヘルガ、筆者、女性同盟の会員

歴史的に見れば、故地への帰還という日独の事実を比較した場合、戦前の移住地、移住期間の長さ、そこでの住民との関係や政治的な思惑などから、かなり異なった様相を呈している。とはいえ、移住地からの逃避行中の性被害、飢餓、病気、難民収容所で受けた差別、食糧不足、夫の戦死や強制労働による不在のために生活苦など、日独ですべてが驚くほど、共通している。加害者性と被害者性の間に揺れ動く女性たちの苦しみも。そして、女性たちが、ごく最近まで、その被害の痛みについて、声をあげられなかったことも。それをおして、ようやく表出されるようになった彼女たちの語りも。そのうえ、戦後の歩みも、多くの点で日独の女性たちに共通点があった。私にとってショックだったのは、強姦後自殺したドイツ女性たち（そのほとんどはソ連兵によるもの）の数が6000人以上にも上ったということだ。ベルリン陥落の際には、たった3週間で性被害にあった女性たち200人以上が自殺したそうだ。男性も含まれていたとはいえ、満蒙開拓団の集団自決は、私は日本人だけの特有な現象かと思っていたのだが、決してそうではないことに衝撃を受けた。会場へ向かう電車の中で読んでいた本で、日本人引き揚げ者のうち、強姦で妊娠した女性が佐世保港が見えた途端、身投げした話が深く悲しく、しかし、こういうメンタリティも、女性として洋の東西を問わず、共通しているのだと分った。

歴史への対応が違う日本とドイツ

ただ、この歴史に対する態度は、今まで述べてきたように、ドイツと日本とで大きく異なる。今回それをまざまざと見せつけられた思いだった。

たとえば、このセミナーが定期的で開催されているのは、政治教育センターという公的な機関であり、森の中にある宿泊研修施設で大変すばらしいところだ。この施設にも、そしてこの催し物自体にも、この会が刊行している出版物にも、ドイツ内務省が相当な財政援助をしている。そして、セミナー参加の主として女性たちの活気のあること！ 皆、なにかしらこの占領地・引き揚げ体験とのかかわりのある70～80代の人たちだが、熱心に講演を聞いて、メモを取って、質問して、ディスカッションをして、という具合で、圧倒された。参加者の中には、かつてドイツが占領した地域のポーランドから、若い人たちも招待されて来ていた。少人数のセミナーだったが、歴史に対する責任と自覚が、ひしひしと感じられる。人々の意識、それを後押しする政府の姿勢、どれをとっても、日本人の私にはうらやましいものだった。それはひとえに、ドイツが自分たちの歴史に対してどのように向き合うか、そしてそれを教育を通して、どのように次世代に伝えていくか、という社会全体のコンセンサスにかかわっている。歴史は、今まさに現在進行形で続いているのだ。



森の中にあるヘルムシュテット政治教育センター

今回、この講演という機会を得て痛感したのは、国際的なネットワーク構築の必要性だ。女性たちの被害や、戦争犯罪は、一国だけの問題ではない。孤立しがちな日本の女性たちも、もっと視野を広げ、似たような立場、意識を共有する人たちと交流を深めていくことによって、次の一步を踏み出していけないのではないかと思う。もう少し、ドイツの女性たちと付き合いながら、何ができるか、考えていきたい。

(フックス・まりこ：1953 生まれ。公文式デュッセルドルフ・オーバーカッセル教室指導者、ドイツ公益社団『のりこえねっとドイツーヘイトスピーチとレイシズムを乗り越える国際ネットワーク』『Sayonara Genpatsu Duesseldorf e.V.』理事。ドイツ在住 32 年。日本の公立中学校で教師として勤めた後、デュッセルドルフ ハイน์リッヒ・ハイネ大学でドイツの教育学を学ぶ。)

義勇隊に唯一の現地隊があった ご存知でしたか。

七次 勃利訓練所、昭和19年4月 内原訓練所へ
昭和20年5月 勃利訓練所へ

末広 一郎

— はじめに —

満蒙開拓青年義勇隊は一次から八次（昭和13年から昭和20年）までに、347ヶ中隊が日本国内から満洲にある訓練所に入隊しています。その数は8万6千人に及んでいます。

なのに唯一満洲国内から募集された義勇隊があります。

昭和19年4月、七次高田中隊、勃利訓練所 96名が内原訓練所で1年間の訓練を受けて、翌20年5月に勃利訓練所に入所しております。これを現地隊と呼んでいます。

現地隊の悲劇というか艱難辛苦を背負った、二重、三重不合理と苦しみをあびせられた中隊は他にはありません。実態を知って頂くため拙文ながらお伝えするのが今回の目的です。

1つは、敗戦となり勃利訓練所も解散、各中隊毎に自由行動となり、逃避行の道に進むしかなかったことです。各中隊は中隊長、幹部の指揮の下、纏まって行動逃避行となりましたが、現地隊は中隊長不在のため（運悪くこの時家族5人を迎えに野田隊員を連れて出かけていた）、15、6歳の青年が満洲の曠野に捨てられたと同様に、各自の判断で指揮者もないまま大陸をさまよう逃避行の道を歩まなくてはならない苦難の始まりでありました。

今1つは、家もなく、親もおらず、帰る所がなくなっていて、独自に自分の判断で帰国への道を歩むしかなかったことです。なんとかかろうじて日本にたどり着いてもそこでも、市も町も受け入れてくれない、路頭に迷う悲劇がありました。

名簿（通信2号掲載）を見てもう1つ言えることがあります。それは帰国後不明、所在が確認できないものが多いことです。帰国したものの、一人で遅しく生きるしかなかった、訓練所から捨てられ関東軍から捨てられ、日本国から捨てられたということでしょう。二重、三重の苦しみの1つであると思います。

帰国後不明者がどこかで力強く、開拓精神をもって遅しく生きて、平和な家庭を築き、幸せに生きていてくれることを信じて止みません。

現地隊資料館のあることを知り、今回我々は「交流会（勉強会）」と銘打って、長野県軽井沢大日向に参集しました。

以下、その時の報告を個人誌“満蒙開拓平和通信2号”に掲載しましたものに、若干手を加えてお知らせ申し上げます。

— 現地隊を知る —

2001（平成13）年の嫩訓八洲会京都大会開催の時、打ち合わせのため集まって下



左が資料室、右が野田さん邸宅

さった中に、現地隊の畑脩三さんがおられ、「逃避生還の記録」現地隊高田中隊の中隊史を持参されていました。

長年嫩訓八洲会で義勇隊のことはある程度知っていたつもりでしたが、現地隊があったことを知らなかったので、恥ずかしいと思いました。

驚いて唾然と思ったことが二、三ありました。その一つが、満洲国内で義勇隊を募集して、何故内原訓練所で訓練の必要があったのか、不思議でもあり、おかしいと思いました。

次に、内原訓練所で1年間も何を訓練する必要があったのでしょうか。日本国内から渡満する中隊は、内原で満洲の風土、気候に耐える頑健な体力作りのための訓練でした。既に満洲で気候風土に慣れた逞しい青年であった現地隊に、内原で1年間の訓練が必要だったのでしょうか。別な理由があったに違いないと思います。

それは、内原訓練所の一年間の訓練の内容で知ることができます。「戦争に奔放された青春」野田邦雄著書から、次の文面が教えてくれます。「現地隊は優秀な中隊であったから1年になりました。」と、高田中隊長が言われています。

しかし、目次を見ると、武具池、冠水水田、三菱飛行場、八王子競技場などの作業や、徴用工などに駆り立てられ、訓練とは程遠い労働力のための動員に使われたのであります。早く現地開拓団、訓練所に還すべきであったと思います。

敗戦となり現地中隊には、逃避生還すれど、満洲国内には既に帰る父、母の居る家がありませんでした。さりとて日本国内にも住む故郷はありませんでした。二、三重の苦しみを持った唯一の中隊であったのであります。

唯一、現地隊の高田中隊を知って頂くため、畑さん、野田さんに八洲会会員になって頂き、後世に残すため、八洲会で活躍して下さいました。

更により深く現地隊を伝え残すため、今回の大日向の土に触れる勉強会を開催できましたことを幸いに思うものであります。

— 現地隊資料室見学 —

軽井沢駅に下車し、タクシーで大日向へ。野田邸現地隊資料室に13時過ぎ到着しました。柳澤静子さん以外、皆様揃っておられました。元気な姿で挨拶をすませ、資料室へ集合しました。

野田邸とは別棟になった平家一軒が資料室になっていました。整理整頓が行き届いており、展示品、写真、出版物が整然と掲げ並べてあり、知らないものや珍しいものが数多く展示してありました。中でも入って直ぐ左側には高田中隊長の在りし日の写真が大きく飾ってありました。

現地隊の経過報告を野田さん、稲さん、続いて畑さんの発言がありました。

現地隊も畑さんあってのもの強く印象に残っています。ご高齢ながら付き添いで参加下さいまして、本当に有難うございました。講演と詳細に亘って説明して下さいました。知らなかったことが多いので、見学に来たのを有効に感じました。

— 隊友会が開催されていた —

特に感動したことは、11回に及ぶ隊友会を開催され、その会の写真があったことです。現地隊として戦後訪中された記録写真がありました。短い時間でゆっくり見ることができませんでしたが、感激に酔いつぶれて拝見致しました。現地隊を概略ではありますが、会得できました。紙面の都合で紹介できませんが拙文故にこの辺でお許し下さい。

隊友会が開催された日程表が掲げてありました。隔年毎に開催され、場所も各地で施行されています。大会の様様を野田さんはDVDに収めておられ、拝見させて頂きました。写真があれば紹介も可能ですが、映像なので、見せて頂く以外にないと思いました。活気に満ちた生き生きとした表情の参加者の方達が録画されています。野田さんは「私がカメラを撮るのだから、私が映っていません」と言われました。隊友会、知らなかったことの1つでありました。

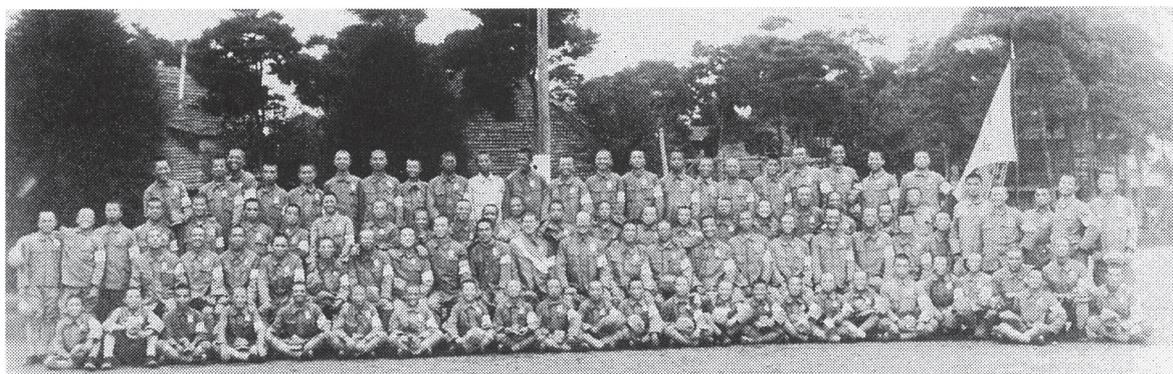
昭和48年 4月	第一回	隊友会	軽井沢
昭和62年11月15日	第二回	隊友会	奈良県 桃山荘
平成 2年10月21日	第三回	隊友会	福島県 白河
平成 4年11月 8日	第四回	隊友会	山口県 大観荘
平成 7年10月19日	第五回	隊友会	長野県 上田
平成 9年10月19日	第六回	隊友会	京都
平成11年11月 日	第七回	隊友会	岩手県
平成13年 3月21日	第八回	隊友会	茨城県 内原
平成14年 月 日	第九回	隊友会	長野県 軽井沢
平成16年11月10日	第十回	隊友会	山口県 岩国
平成18年10月 5日	第十一回	隊友会	京都

展示されていた隊友会の開催日程、場所

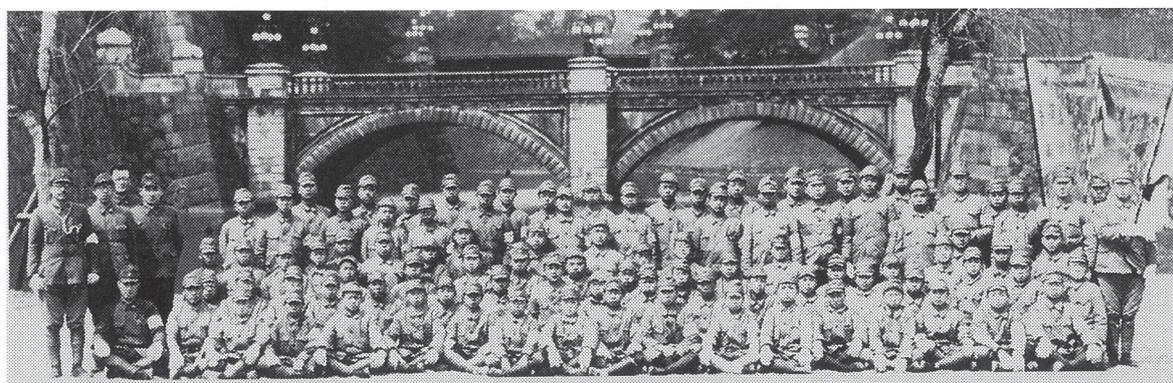
— 現地隊の名簿あり —

展示されている中に、集合写真が2点あります。

1枚は、内原訓練所で日輪兵舎の前でのもの、もう1枚は宮城前のものがあります。書き写しの名簿があったので、興奮して見せて頂き、コピーして入手しました。高田中隊長が内原で入手されたもののように思いました。私は感激して持ち帰ると同時に活字にしました。集合写真の宮城前のものに、一人一人名前を書き込むことができれば、現地隊の存在を明確にすることができる、現地隊を実証することができるのだと感じました。資料室から得た大きな収穫でありました。



昭和19年 満蒙青少年義勇軍現地隊 内原訓練所 入所



昭和19年 来日して皇居二重橋前にて

— 天皇・皇后巡幸の碑 —

現地隊資料室での野田さんの講義を聞き、資料室内部も見学も終わりました。夕食まで多少時間があるので、この上の方で近くに天皇・皇后巡幸の碑があるからと見学すること

になり、二台の車で向かい、舗装していない道を少し上った所に大きな墓地公苑があり、その前を通って左に曲がり上り坂を少し行った所に碑がありました、記念に写真を全員で撮影しました。もう1つ開拓の碑がありました。

周囲を眺めると、嘗っての開拓団の土地、畑は草と樹木が茂っていて昔の面影はないのだと言われました。又、別荘地帯と言われたこの土地も、今は廃跡が多く、草が茫々となっていました。開拓団として働いている農家で農業をしている方は1、2軒のみとのことでした。



御巡幸記念碑 昭和42年10月7日建立

— 夕 食 —

夕食の少し前頃だったでしょうか。柳澤静子さんが到着されました。9名の参加者全員が揃ったところでテーブルにつききました。伊藤一己さんの2世によるおいしい料理が次々運ばれました。ゆっくり現地隊の話を伺い乍ら、ビールを一杯頂きました。満蒙開拓研究科家の高橋健男先生、野田さんを中心に話が盛り上がり、時間の経つのも忘れていました。柳澤静子さんはお近くなので、帰宅されましたし、篠原さんは奥さんの体調が悪いとかで、夕食後に帰東されました。



故伊藤一己さんのご子息、一弘さんによる賄いでご馳走になる

2階にちゃんと布団が敷かれてあり、ぐっすりと寝込んでしまいました。野田稲さんは、「来て頂いても旅館のような訳にはできません」と言われましたが、どうしてどうして、下手な旅館より綺麗で行き届いていて、親切に対応して下さいました。なんとってお礼を申し上げてよいか、本当に至れり尽くせりのお世話様に相成りました。有難うございました。

— 現地隊の1人 故伊藤一己さん —



故伊藤一己さん

今回の集いで感動すべきことは、1泊の我々の賄いを担当して下さいました方、伊藤一己さんのご家族の一弘さんであることを知って、恐縮の外はないと思いました。

通信2号に掲載しました、大日向開拓団3つの大日向を辿る項をご覧下さいまして、言えることは、明治時代からあった大日向村の住民であった伊藤一己さんご一家は、渡満されて、大日向開拓団で入植されました。不幸にして敗戦となり、元の大日向に帰還してみれば、土地も家もなかったのもので、この地でいわゆる本当の開拓をされました。第3の大日向と言われる所以であります。

伊藤さんは、第2の大日向開拓団より現地隊高田中隊に義勇隊の1人として、内原訓練所、勃利訓練所を経て、敗戦で第3の大日向開拓団に入植されました。

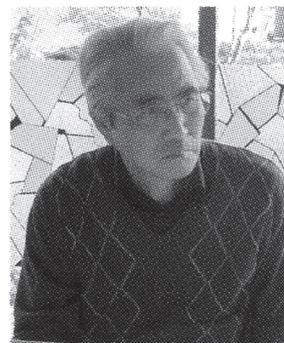
第1回の現地隊隊友会がここ大日向で開催されたことがこのことをよく物語ってますと

即ち之が実証される所以であります。折角お目にかかりましたが、台所でお忙しそうで、立ち入ってお話を聞くことができませんでした。残念であります。

これからも、現地隊を風化さすことなく大日向を後世に伝えてゆく役割を果たして下さることを切望してやみません。

— 高橋健男先生の参加 —

今回の企画を思い立ち、1人でも迷惑でも現地隊のことをもっともっと詳細に把握して伝え残したい願望を、折角だから1人でも参加者があればと望みをかけてみなさんにご案内した所、意外にも高橋先生から1番に参加申し込みがあり、より有意義に勉強できると一縷の悦びに浸ることができました。さすが満蒙を語る第一人者として大日向と案内がしてあったので、大日向については専門的調査研究されていました関係で、いろんな資料を沢山送って下さいました。



現地隊のことに耳を傾けられる高橋先生(末広)

ところが、偶然とは言え、現地隊のことしか頭になかったので、一般開拓団のことは、高橋先生について参考になればと考えていました。大日向と現地隊が結びついていたので、大変有意義な交流会になりました。そして謹呈した“通信2号”の出版物紹介の長野県の満洲移民—3つの大日向をたどる—30頁をご覧ください。そして又、「現地隊の一人伊藤一己さん」の項をご覧ください。

現地隊と大日向開拓団が、斯くも結びついていたとは、今回の大きな収穫でありました。現地隊資料室のことしか頭になかった私は、高橋先生のご参加で、一般開拓団のことには余分に参考になればぐらいに思っていましたから。大変有意義な集いになったと感謝しております。高橋先生のお陰で大なるものを得ることができ、悦びに堪えません。

— 現地隊の誇り —

野田さんから頂いた資料の中に、天皇・皇后陛下が大日向開拓の地を行幸啓されているものがありました。今回天皇の「巡幸の碑」を見学して勉強になったことは、この地に野田さん、伊藤さんの邸宅があり、大日向開拓地と現地隊の結びつきがあることを知り、地についての関係があったことです。度々の天皇・皇后の訪問で、永遠に風化することはないと思いました。現地隊と大日向は恵まれていると思いました。後世に伝え残すことができる事実での存在感を強く与えてくれました。他のところでも同じことを申し上げましたが、昭和天皇、今上天皇と二代に亘って同じ大日向開拓地を行幸啓された例は他にはありませんとのことでした。

如何にこの地が幸運であるかが解ると思いました。我々も又、誇りある現地隊を後世に伝え残す努力をしようではありませんか。

(すえひろ・いちろう:1925年生まれ。40年、嫩江訓練所に入所。43年、八家子^{はつかし}開拓団へ入る。日本の敗戦後シベリアに抑留さる。49年、舞鶴に引き揚げ、49年から53年まで国立療養所入院。55年みなみ工房設立。60年、とき印刷設立。定年で退職し現在に至る)

満蒙開拓青少年義勇軍「満洲現地隊・高田中隊」

高橋 健 男

1 軽井沢大日向地区再訪

2017（平成 29）年 10 月初旬、この年の 4 月に終焉の会を迎えた嫩訓八洲会（旧満洲国北安市嫩江青年義勇隊訓練所修了生の会）の有志からの誘いを受け、長野県軽井沢の大日向地区を訪れた。国道 18 号線借宿から標高 1,500～600 メートルの浅間台をまっすぐ北に上る。ここを訪れるのは 2007 年、2012 年につづいて 3 回目である。大日向村開拓団に関しては、母村竜興寺にある慰霊碑や軽井沢開拓地の記念碑、そして開拓記念館を調査・訪問済みであった。



それぞれの機会に浅間山麓の戦後開拓地に立つ昭和天皇 前立右端が野田邦雄さん、左端が畑脩三さん巡行記念碑のところまで上った。今回も参集メンバーとともにその地に立った。そこはこの年夏（7 月 23 日）、天皇皇后両陛下が私的旅行で軽井沢に滞在された折、雄大な浅間山麓に抱かれたこの巡行記念碑とその周辺に広がるレタス畑を巡られた地である。記念碑のまわりは 10 年前に訪れた時とは様相を異にしていた。辿り着く農道がアスファルトで整備されていたのはありがたかったが、記念碑裏や横の立ち木は大きく成長していて記念碑をカメラに収めても、後ろの雄大な浅間山が写り込まない。ここに掲載した集合写真では記念碑は後ろ中央にあるのだが、指摘されないと分からないほどである。

2 満蒙開拓青少年義勇軍「満洲現地隊・高田中隊」資料館

満蒙開拓青少年義勇軍に“満洲現地隊”が編成されていたことは初耳だった。今回は元隊員から直接話を聞くことができるという。加えて、満洲現地中隊の実態や高田成章中隊長に関する話を聞き、戦後開催してきた親睦会の様子などの資料を収集・展示している資料館を拝見できるという。資料を集め元隊員との交流記録を集積し、個人の手で資料館を建て展示してきたのは元隊員の野田邦雄さん（東大阪市、89 歳）である。

野田邦雄さんは昭和 4 年 1 月の生まれで昭和 17 年 5 月、兄とともに旧吉林省舒蘭県の小城子郡上開拓団（岐阜県送出集合 1・3 次）へ入植、昭和 19 年 5 月、満洲現地隊に入隊した。昭和 21 年 7 月帰国後は、鶏卵業を開業したり電気工業所勤務等を経たりして、ステンレス製品加工工業を立ち上げた。昭和 48 年には東大阪市で野田金属工業を設立し、一貫して技術者としての道を歩いてきた。高齢になった今も年間 40 回を超す修学旅行生や職場見学生を受け入れ、若者たちに物づくりの原点を伝授している。自身が元隊員で奥方が在満国民学校で高田校長の教え子ということもあり、昭和 48 年には高田中隊長を会社の監査役に迎え、以後家族同様に生活を共にしてきた。

軽井沢には大日向開拓団から現地隊に入隊していた旧友がいた関係で会社の保養所を建て、研修棟の 1 階を現地隊資料館として整備した。この地は満洲現地中隊の生存者が戦後 28 年目の 1973（昭和 48）年、ようやく連絡がとれた生存者 15 名が初めて集った地である。以後 2 年ごとに会合して旧交を温めてきた。野田邦雄さんは 2009（平成 21）年 7 月、手記『戦争に翻弄された青春』で“満洲現地隊”の全貌を記録し、自費出版した。

畑脩三さん（京都市、94 歳）は大連市で某貿易商に勤務していた。高田中隊入隊時は 20 歳で一

番の年長者だった。徴兵検査に甲種合格していたため内原訓練所での訓練途中の10月、隊員と決別せざるを得なかった。この短い期間、最年長者ということで高田中隊長からは特に目をかけられ、深い慈愛を感じながらも反面に厳しい指導と薫陶を受けた。入営後はモンゴル方面や上海付近と各地を転戦し、満洲現地隊の同志の消息が全く分からないまま昭和21年3月に復員した。帰国後は京都市で印章関係の老舗を継ぎ、高齢の現在も取締役会長の現役である。

畑脩三さんは戦後断片的に耳にしてきた現地隊同志に呼びかけ1992(平成4)年8月、回顧集『満蒙開拓青少年義勇隊満洲現地隊・高田中隊 逃避生還の記録』をまとめた。更には高田中隊長の書簡・遺稿を収録した別冊を2002(平成14)年にまとめた。収録された手記類により満蒙開拓青少年義勇軍満洲現地隊・高田中隊の実態が明らかになっている。ただ、“満洲現地隊”のことを知る人は世にほとんどいない。

3 満蒙開拓青少年義勇軍“満洲現地隊”とは

満蒙開拓青少年義勇軍“満洲現地隊”は昭和19年3月にその募集があり、満洲各地の開拓団と満鉄沿線の鉄道、商社、商店、官庁等で生業する家庭の子弟を対象としたものであった。資料館にある隊員名簿によれば96名中62名(約65%)が開拓団出身者である。都会出身者に関しては詳細が不明であるが、隊員の誰もが大陸に理想の村を築くことに夢を抱いて参加した純真な少年たちだった。野田邦雄さんは、「将来大陸で農業をするには人力だけではだめだ、新しい農業を学ばなければ」と思っていたので、「北海道農法が学べるし、数年間修行するつもりで」応募したと語る。

第7次高田中隊に関する記録は『満洲開拓史』に短文の記録があるが、野田さんも畑さんも「誤解されかねない」記録だと指摘する。隊員の約80%が死亡または行方不明で、帰国を確認できた隊員はわずか19名にすぎない。そのうち現在の健常者は4名のみである。内原訓練所での現地隊のことは「現地隊を一番理解し信頼していた河原訓練部長しか知っていなかった」と思われるし、満洲で個々バラバラになった事情等で、「私たち生還者でも知るすべもなく分からないことばかり。高田中隊長が帰国後に隊員の本籍地や出身県庁へ行って調べた結果、または生還隊員から聴取して得た情報しかない」と、実情に一番詳しい畑脩三さんが語る。渡満してわずか3ヵ月、加えて中隊長が留守中に突然のソ連軍の満洲侵攻となった。統率のとれるはずはない。両親のいる開拓団への思いが強く、隊から離れる隊員が続出する。その逃避行の途中で暴民の襲撃を受け亡くなった隊員がいる。別れたままその後の消息が途絶えた隊員も多い。今もって詳細は不明なのである。

渡満前の内原訓練所が異例の1年に達している。その間は内地農家への援農、農業用水溜池の堰堤工事、農地用開墾作業等々各種作業に従事し、名古屋の三菱飛行機工場へ挺身隊にも出た。比較的年齢が上の者たちで編成されていたし満洲現地の開拓団での経験を持つものが多かったことから、内原訓練所では模範中隊となった。

いよいよ渡満となった昭和20年春、毎年この時期は新しい隊員が入隊してくる時期だったが、この年の内原入所中隊は少なくなっていた。壮行式に勇ましく鳴り響くいつもの鼓笛隊の音はなく、歓声をあげて見送ってくれる新入隊員もおらず、淋しい別れだった。通過する東京、名古屋、大阪はどの街も焦土と化していた。下関から釜山に上陸、朝鮮半島を縦断して新義州から鴨緑江を渡って入満した。彼らにとっては「懐かしい満洲に帰った」のであった。

現地大訓練所のひとつである勃利訓練所ではもっぱら農作業に励んだ。野田邦雄さん手記によれば、「本土で研修を終えて出身地の開拓団に帰った隊員、軍隊へ入隊した畑さん等が除隊しておらず、勃利訓練所へ入所した隊員は82人」になっていた。入所は作物がととも早く生育する時期と重なっていたので、2、3日もたつと作物を追い越して茂る雑草との闘いの毎日だった。水田も班ごとに交替して草取りに行った。

訓練所に来て1ヵ月ほど経って高田中隊長は、北へ数百キロ離れた北安省克山県の劉大櫃芙蓉郷開拓団(長野県送出集団9次)にいる家族招致に出かけた。そこは高田中隊長が義勇隊に赴任して

くる前まで開拓団の在満国民学校長を務めていたところで、母、妻、子供4人を残していた。昭和20年7月2日、中隊長の要請で野田邦雄さんが単身で中隊長の元へ応援に出向いた。残された隊員たちは大多数が15～16歳の少年たちで、遠く親元を離れてきているので親代わりの中隊長が不在の日々は心細く寂しい思いであった。野田邦雄さんは、「一日も早く中隊長と家族を伴って帰ってくるから待っていてくれ」と一人ひとりと言葉を交わし、しばしの別れを惜しみつつ勃利訓練所を後にした。しかし、この時が友との最後の別れとなろうとは誰一人予想もしなかったことであった。

4 「麻山に高田校長ありせば…」、若き女教師・岩崎スミさんの述懐

中村雪子『麻山事件』はある章で「^{ハルマ}哈達河小学校・教師・教え子」を詳述している。この哈達河尋常高等小学校の初代校長が、後に“満洲現地隊”の中隊長となった高田成章である。高田校長は遠大な構想の下で学校運営を行い、何事も自らが率先して行動する若き校長であった。高田校長の赴任は昭和13年7月1日、そして哈達河在満国民学校と名称が変更になった昭和16年4月、若き女教師・岩崎スミさん（旧姓畑）が17歳で赴任してきた。高田校長が北安省の劉大櫃芙蓉郷開拓団に転任したときであった。そして高田校長は昭和19年4月1日、家族をこの開拓団に残したまま単身で義勇隊満洲現地隊の中隊長に抜擢された。上述の通り、8月10日～9月18日、勃利訓練所に帰ることもできず開拓団地で籠城、開拓団を追放されて避難、10月8日に新京に到着した。その避難中に家族6人全員を失った。

満洲現地隊記録に従えば、若き女教師・岩崎スミさんは直接高田校長の薫陶を受けたことにはならない。しかし、岩崎スミさん手記ではしばらくの間は高田校長の下で勤務していたことをうかがわせる。哈達河開拓団の団史『麻山の夕日に心あらば』掲載の手記の最初に、「哈達河国民学校を偲ぶ、高田校長時代」を書いている。「高田校長は校長と教師と舎監の三役を一人で果たしておられ、時には炊事のことも生徒の寝小便蒲団の洗濯などもなさいました。校長は特に生徒の布団の清潔には非常に注意なさいました。自分から生徒の布団に手を触れ鼻をすりつけて寝小便を見つけ出し、洗いあげた蒲団の点検もなさるといふ念の入れ方でした」と記す。

尊敬する高田校長を岩崎スミさんはさらに語る。「しばらくして高田校長は北安の方にご転勤になられました。生徒は涙をこぼしました。校長も泣いていたようです。北安からの便りに『自分は自刃を抜きすぎた』とありましたが、私にはわかりませんでした。厳しいまでに生徒を愛した校長を私はよく見て知っていたからです。生徒のためなら火の中水の中も厭わぬという気迫の校長でしたが、スパルタ式教育でもありました。校則を破った者には全校生徒の前で整列ピンタしました。“鉄は熱いうちに打て”という方針のようでした。しかしピンタを頂戴した生徒は先生を一層慕っていたようです。とにかく、高田校長去りしあとはタガが緩んだような感じでした。あの立派な校舎に高田校長こそふさわしい校長であったのです」と。そして麻山事件に触れて、「熱血の校長を失ったことを生徒のために惜しみます。生徒の不運はこの時始まったと思うのは、麻山に高田校長ありせば、生徒は救出されたであろう。高田校長なりせば…と私は思うのです」と続けている。

哈達河開拓団が避難行動をとった時、岩崎スミ先生は夏季研修で東安に出張していた。若い生徒たちと避難行動を共にできなかった慚愧の念が今も残る。2013年と14年の2回、北海道夕張郡の自宅に岩崎スミさんを訪ねた。筆者が元教師であることを承知している岩崎さんは、「高橋さんならわかるでしょう？！ 教師が生徒を殺しますか？ 助けるのが教師でしょう？！」と畳みかけられた。骨粗鬆症を患い歩行もままならない90歳を超した岩崎さんが、鬼気迫る語り口でこう問いかけるのである。よほどの思い



左から小出公司さん、筆者、岩崎スミさん

がそこにあると感じた。

だから、「今日も正平君と元也君がその窓口に来ていたのよ…」と、夢ではなく本当のこととして語る。自分が担任した東家の子供たちのことだ。小出正平・元也兄弟は幼い時、哈達河開拓団員の妻・産婆をしていたおばさんのもとに養子に入っていた。自宅訪問にご一緒した小出公司さん（新潟市）は実兄である。「二人が現れた」という話は満洲の思い出話の中でのことであった。筆者ならびに小出公司さんと岩崎スミ先生、高橋幸子さんとの出会いについては、既刊『星火方正』に紹介してあるのでここでは詳細は割愛する。詳しくは第 12 号（2011 年 5 月）、第 13 号（同 12 月）、第 20 号（2015 年 5 月）をご覧ください。

NHK 取材班『再会』（1981、放映記念碑が満蒙開拓平和祈念館の隣、長野県阿智村長岳寺にある）が活写する残留孤児となった馬場周子さんとの 35 年ぶりの再会場面、「先生、“大きい馬小さい馬”の歌をうたいましょう」と馬場周子さんが突然言った。「お馬の親子」の歌だった。次に「学校、学校、一年生」の歌だ。番組のナレーションは、「たどたどしく歌う様子は、すっかり 1 年生と 20 歳の先生の昔に戻っていた」とあった。岩崎スミさんにとっては何年たっても当時の 1 年生一人ひとり忘れることができない“よい子たち”なのであった。

5 高田中隊長の愛・慚愧・義憤

満洲現地隊元隊員の畑脩三さんがまとめた『逃避生還の記録 別冊付録』（2002）に、昭和 27 年 7 月 14 日付で避難行動後の昭和 21 年 1 月 14 日に死亡した元隊員の父に宛てた死亡状況報告の便りが掲載されている。隊員たちと避難を共にすることができなかった高田中隊長が、帰国後の隊員たちから聴取した内容を謹んで両親に報告した便りである。活字に起こして B4 で 10 ページ分に及ぶ長文である。中に次のようである。

隊員・大滝辰雄小隊長を、「敗戦以来延吉まで中隊長の代わりとして大変面倒を見て頂いた。御恩は忘れません。でも何故日本まで一緒に帰ってくれなかったのですかと、大滝さんの面影に泣きつきたくなるのです」と偲ぶ。「大滝君の写真は中隊にたくさんありました。これが内地で編成した中隊でしたら、各隊員に必ず内地在住の縁者・知人あって写真も得やすいのですが残念です」と、如何ともしがたい悔しさがにじむ。

「義勇隊送出名簿は各県にあるが、わが現地隊は満洲開拓総局の編成につき大東亜省以外になし。従って高田中隊に相談すべき母県なく、開拓自興会も相手にせず、全く困惑す。もし名簿なければ、全国に引揚げた隊員、親への連絡方法が皆無となる」——だから昭和 22 年 10 月の帰国後、内原訓練所で入手した隊員名簿を手にとりそれぞれの出身県庁や本籍地を訪ね歩いた。しかし、消息が判明したのは 10 数名にすぎなかった。開拓団員だった家族の消息さえ分からなかった。

避難先の新京では開拓団長や教師たちを集め、収容所で日毎少なくなっていく子供が一人になっても「教育は欠かせない」と、寺子屋授業を率先実施したのも高田中隊長だった。幼いわが子を最後に家族全員を失った時、家族を守れなかった責任と無念さをしきりに口にするようになった。「家族だけでなく、『隊員たちは今頃どこでどうしているだろうかのう』と、隊員一人一人の名前を唱え、頭を垂れていた」は、避難行動を共にした隊員・野田邦雄さんの述懐である。「先生は人一倍責任感が強かっただけに、「このまま自分だけが祖国へ帰ることはできない」と呟きながら、何度も何度も『親不孝者、親不孝者』と言って自分を責めていた」（野田邦雄手記）という。

高田中隊長は 80 歳になった 1985（昭和 60）年 5 月、悲願の満洲現地訪問の機会を得て、現地の人たちが「亡霊の丘」と恐れていた墓地で亡き母・妻子の遺骨収集・慰霊を行うことができた。10 年後の 1996（平成 8）年 3 月 16 日、90 歳を迎えて死去した。

（たかはし・たけお：満洲移民研究家、本会会員。開拓団関連書籍の自費出版多数。）

「満蒙開拓平和記念館」館長就任に当たって

満蒙開拓平和記念館 館長 寺沢秀文

1. 館長就任と開館までを振り返って

2013年（平成25年）4月、全国初の満蒙開拓に特化した記念館として長野県南端の阿智村に開館した「満蒙開拓平和記念館」、早いもので開館満5年を迎えます。これも偏に、開館前から、そして開館後にご支援を頂いた多くの皆様方のお陰と厚く御礼を申し上げます。この開館5周年を迎えるに際し、去る3月8日開催の当記念館の役員会において、これまで館長をお務め頂いた河原進館長に代わり、不肖私が記念館の館長を務めさせて頂くこととなりました。今後とも引き続きどうか宜しくお願い申し上げます。

思い起こせば、この満蒙開拓平和記念館建設事業に取り組み始めたのは平成18年（2006年）7月のこと。記念館建設の実質的母体となった飯田日中友好協会の第44回定期大会において記念館建設事業に取り組むことを採択したのが実質的スタートでした。直ちに地域の行政、各種団体等にお声かけし建設準備会を組織。準備会会長には提唱団体であった飯田日中友好協会の河原進会長が、また記念館建設のいわば「言い出しっぺ」でもあった当方が事務局長にそれぞれ就き、準備会事務局も取り敢えずは私の会社内に置いて、民間主導での事業取り組みがスタートいたしました。全国で唯一の満蒙開拓に特化した記念館を、全国で最も多くの満蒙開拓団を送出したこの長野県南部の飯田・下伊那地方に建設しようという事業趣旨は多くの皆さんの一応の賛同は得たものの、これまでの戦後70年間、いわば「不都合な史実」として余り取り上げられてはこなかったこの「満蒙開拓」という史実を敢えて取り上げようというこの取り組みは正しく紆余曲折の繰り返しでした。国策として進められた満蒙開拓、当時その送先の先頭に立った行政等もこの建設事業に総論賛成ながら、「そういったものを建てても果たして維持出来るのか」等の慎重論が多く、建設協力には消極的でした。「ならばまずは民間主導で」と事業を立ち上げ、建設資金の募金活動等にも取り組み始めたものの、なかなか建設の見通しが立たず、やがて準備会内でも「これは容易なことではない」というムードも漂い始めました。しかし、事業の「言い出しっぺ」でもあった私自身としては、例えどんな小さなものであっても、この記念館は絶対に実現してみせるという意欲は何ら衰えることはありませんでした。それは、この満蒙開拓という多くの犠牲を出した史実の持つ重み、そしてそこから未来の平和に向けて学ぶことの教訓の多さ等からしても、この建設事業は絶対に成功させなくてはならず、また多くの心ある人たちの共感を呼ぶはずという信念が揺らぐことはありませんでした。とは言え、深夜に一人、会社に泊まり込み、疲れた頭、体で準備会の資料作成、発送等に取り組んでいると、正直なところ、「国策で送り出された満蒙開拓という史実を伝える記念館を作ろうと言うのに、どうして一民間人に過ぎない自分が深夜に家にも帰れずに無償活動で心身を削って取り組まなくてはならないのだろう？ 開拓団送先の先頭に立った行政や教育界は一体何をしているんだ」というやるせない義憤を覚えた時期もありました。しかし、それも今は懐かしい思い出です。

事業取り組みから丸2年を過ぎた頃からようやく少しずつ光明が差し始めました。飯田

市の隣にある下伊那郡阿智村から「ならば阿智村内で記念館を建てたらどうか」という有り難いご提案を頂き、村有地を無償で貸与してくれることとなったのが平成20年春のこと。そして、それまで私の会社内に置いていた準備会の事務局も、地元の方のご好意により阿智村内の国道沿いの一軒家を格安でお借りすることが出来、ここをあらたな準備会事務局としました。しかし、流石に準備会事務局を当方一人で本業の傍らボランティアとして担い続けることにも限界があり、平成21年の暮れに初めての専従職員として三沢亜紀さん(現在の記念館事務局長)を採用、記念館準備会の体制もようやく少しずつ整ってきました。更にそれから3年以上を要して、念願の記念館が開館出来たのは構想着手から足かけ8年を経ての平成25年4月のこと。この時は本当に嬉しかったものの、同時に「これからこそが本当のスタート」と気を緩めることも出来ませんでした。その後の維持も楽ではなかったからです。建設費用は全国からご寄付頂いた尊い浄財に加え、「民間がそこまで頑張るならば」と、最終的には長野県と地元の広域連合(14市町村)からも建設費の一部助成を頂きました。しかし、「その代わり、建てた後はあくまで自分たちで運営を」と言うことで、開館以降現在まで入館料とご寄付だけを頼りの民間運営となっています。県と地元市町村等よりの建築費助成を頂いた他、国からも3千万円の助成を頂きました。しかし、これは満蒙開拓という史実を語り継ぐ事業自体に対しての助成ではなく、「国産材使用施設」ということでの林野庁からの補助でした。当時、国からの助成もお願いするべく何回も上京し、国の厚生労働省、文部省、外務省等にも陳情に行きましたが、どこでも「そういったことに対する助成制度は無い」ということでした。それでも多くの皆様方からのご支援等により建設実現出来たことは本当に有り難いことでした。

2. 開館後の経過と驚きであった両陛下のご来館

かくして開館出来た当記念館ですが、大変有り難いことに、開館以降、全国各地から沢山の来館者の皆さんにお越し頂いています。当初の事業目論見では「年間来館者数5千人」との予測でした。私個人としては「絶対にそんなに少ないはずはない」とは思っていたのですが、多くの意見は「そんなものにそんなに多くの人に来るはずがない」というものでした。しかし、開館初年度に3万人が来館され、以降もそれに近い来館者にお越し頂いています。開館以来の来館者数は本年4月12日現在で136,005人ですから、年間約27,000人程度の来館者数となります。勿論、満蒙開拓という特殊なテーマだけに特化した、しかも不便な辺地に立地する小さな当記念館ですから、ある程度の時期を過ぎれば来館者数も減少に向かうということも想定していました。案の定、開館3年目を過ぎた頃から減少傾向が見られ始めましたが、その矢先、驚いたことが起きました。平成28年11月17日、天皇・皇后両陛下が「強いご希望」により当記念館にご来館されました。これには私も本当に驚きました。両陛下が満蒙開拓にご関心をお持ちであることは以前から存じ上げてはいましたが、しかし「不都合な史実」を伝えるこのような場所の存在を不都合と受け止める一部の勢力もある中で、如何に両陛下がご来館をご希望されようとも、前記のような立場の人々にとってのそのような「不都合」なことの実現は極めて困難だろうと思っていたからでした。それだけに、宮内庁から両陛下ご来館のご内示を事前に聞いた時には本当に驚きました。それだけ両陛下のご来館のご意志が強かったからこそのご来館実現であったろうと思いません。勿論、記念館関係者、満蒙開拓関係者等の中でも様々なご意見がありました。とりわけ、戦略上の理由からとは言え、「守ってくれる」と信じ頼りにしていた日本軍(関東軍)

に結果として置き去りにされ、多くの犠牲者を出すこととなった満蒙開拓団員の人々の中などには、「日本軍は天皇の軍隊」として、天皇陛下のご来館を素直には喜べないという意見が一部にあったことも事実です。同時に、元満蒙開拓団員の中でも「天皇陛下は満蒙開拓のことをお忘れではなかった」と感激し、ご来館を心からご歓迎申し上げたいというご意見も多かったこともまた事実です。中立的立場から史実をなるべく客観的、実証的に伝えようという我が記念館として、こういったいろいろな立場でのご意見等も尊重しつつも、私たちのスタンスと同様、「不都合な史実」とされてきた史実に向き合おうとされる両陛下のご来館をご歓迎申し上げさせて頂いた次第でした。

3. これからの記念館運営の課題

両陛下のご来館により、再び来館者数が増加したものの、それをご来館1周年を過ぎた辺りから再び減少傾向に入りつつあります。そのような中で迎えようとしている開館満5周年を前に、以前から「そろそろ後進に道を譲りたい」と言われていた河原進館長より、この春での館長退任、そして当方への館長後継の強いご要望がありました。正直なところ、ボランティア活動として続けてきている満蒙開拓への様々な取り組み、これも本業があってこそそのボランティア活動であり、いつかは館長就任もやむなしとは思っていたものの、出来ればなるべく先のことでと思っていたのも事実です。とは言え、流石にいつまでも逃げ続けるわけにもいかず、両陛下のご来館を花道として退任したいという河原前館長のお気持ちを大切に、この春より当方が新館長に就任させて頂くこととなりました。

かくして当方が新館長となった次第ですが、基本的なところはこれまでと全く変わりません。記念館の開館以来心がけてきた「満蒙開拓の史実から明日の平和に向けての教訓を学び発信していく」という基本的なスタンスを核に据え、ぶれることなくこれからも努めてまいりたいと思います。そして、民間運営であるこの記念館、それによるメリット、デメリットの両方がありますが、この記念館の持てる力、そして魅力の一つは、ここは単なる「箱物」ではなく、そこに人が集い、共に学び、共に考えていく、そんな人々の集う場所であるということにあると思っています。記念館建設構想を立ち上げた時の記念館建設の目的の一つには、満蒙開拓の語り継ぎに関わる人々の集う拠点作り、そしてそこから次の語り継ぎの後継者を育むための拠点ともするということがありました。そして、それは今、着実に実りつつあります。

当記念館では開館以来の基本的スタンスとして、来館者の皆さん等に接する時には、満蒙開拓に対してはいろいろな立場、捉え方があるということを念頭に置きつつ、自分たちの意見や思いを一方向的に押し付けるのではなく、満蒙開拓という史実をなるべく客観的、実証的に捉え、なるべく中立、ニュートラルな立場で伝えていくことを基本とするように努めています。そこから何を感じ、受け取り、学ぶかは来館者ご自身のご判断であると思うからです。そして、きっと平和の尊さを実感して頂けると期待しています。今の当記念館の展示、活動内容等にはそれだけの力があると信じています。満蒙開拓の史実から明日の平和を発信していくために、これからも記念館の維持運営に努めてまいりたいと思っています。

とは言え、満蒙開拓関係者の高齢化等も含め、これからは来館者数の減少も更に進むものと思います。しかし、来館者数の多寡に一喜一憂することなく、これからもぶれること

なく満蒙開拓の史実から平和を発信していきたいと思っています。多くの犠牲と過ちのあった満蒙開拓という史実ですが、そこには未来に向けての平和実現の示唆に富んだ多くの教訓があると思います。それは国策の過ちと日中双方含め多くの犠牲の上で学んだ教訓であり、決して無駄にしてはならない犠牲であり、また教訓であると思います。今後の記念館の方向性としては、やはり次の時代を担う若い世代の人達に、この満蒙開拓という史実があったということを通じて平和の尊さを学び取って欲しいということです。そのためには教育界等とも連携し、平和教育授業の一環として来館等して頂くと共に、今も少しずつ県外等から入ってきている修学旅行等の受け入れも進めていきたいものと思っています。しかし、現在の記念館の狭さでは修学旅行等の受け入れには不十分です。一度には館内に入り切れないために、来館歓迎のご挨拶等も玄関先の屋外でやったり、講話等も一定人数以上になると、近くの阿智村公民館をお借りして等の対応で凌いでいるのが実情です。今後は修学旅行、平和授業受け入れ等を含めての団体対応力を高めるために、新たに120人程度収容のセミナールームを中心とした新館(仮称「セミナー棟」)の増築計画の検討に取りかかりました。出来れば2年以内を実現したいと思いますが、いずれにしても建築資金集めが課題です。また、寄付金集めに頭を下げて回らなくてはですが、これも誰かがやらなくてはならないことです。誰かがやらなくてはならないことで、誰もがやらないことならば、まずは自分たちでやる、そういった思いで取り組み、実現してきたこの記念館です。これからも私たちの挑戦は続きます。私たちの挑戦は、時空を超えて、「満蒙開拓」という史実から明日の平和のための教訓を学ぶための仕組みを作り上げていくという新たな取り組み、正しく明日の平和の実現のための「平和の種まき」であり、これもまた現代の「開拓」であるのだと思います。

私的なことながら、満蒙開拓団員であった当方の両親、そして終戦の年の冬を越せずに現地の避難民収容所の中で僅か1歳の幼い命を落とした長兄等をも含め、満蒙開拓に関わった人々の様々な苦難の歴史等を忘れることなく、そしてそのような悲しい歴史を二度と繰り返さないためにも、「満蒙開拓」には「被害」と「加害」の両面があったのだということ等も含めて、これからも満蒙開拓の語り継ぎに努めていかななくてはならないと改めて思っています。ただ歯痒いのは、これも私事ながら、館長に就任したとは言え、引き続き本業との二足の草鞋を続けざるを得ないということです。館長となった以上、本来ならばこれまで以上に記念館業務等に専念しなくてはならないところですが、前述通りまずは本業あってこそそのボランティア活動であり、またそうして関わらざるを得ないのが民間運営である当記念館の現実です。これからもまた本業との兼務となりますが、幸いなことに当方が常勤していなくても、十分に記念館を切り盛りしてくれている優秀な事務局スタッフ、そして多くの志ある熱心なボランティアの皆さんのご協力等により記念館は維持されています。勿論、それに甘えることなく、私自身としてもこれからも記念館の維持、向上等に向け精進して参りたいと心いたしております。そして、記念館スタッフ一同と共に、これからもこの信州の片隅から世界に向けて平和を発信していく、そんな「小さくともキラリと光る小さな記念館」を目指して、これからも頑張ってお参りたいものと思っています。

どうか今後も、皆様方よりの記念館へのご支援を賜りますようお願い申し上げます。館長就任のご報告とお願いとさせていただきます。(平成30年4月記す)

ドラマ『どこにもない国』の放送実現と葫蘆島からの引き揚げ

寺沢 秀文

1. ドラマの背景と丸山邦雄氏との交流

去る3月下旬、2週にわたりNHKドラマ『どこにもない国』が放送された。ご覧になった方も多いと思う。このドラマ、以前にこの「星火方正」でも触れた通り実話をドラマ化したものであり、原作はアメリカ在住のポール邦昭丸山氏。同氏はドラマの主人公である丸山邦雄氏（内野聖陽さんが演じた）の三男である。

ドラマの粗筋はここでは割愛するも、終戦後、多くの日本人が中国東北地方（旧満州）に取り残され、深刻な状況下、多くの犠牲者を出していた中で、これを何とか救済しなくてはと命懸けで旧満州を脱出、日本に潜入し、GHQのマッカーサー総司令官に直訴等した丸山邦雄氏ら3人の在満邦人救済代表団の活躍を描いた戦後秘話のドラマ化であった。この戦後秘話は長い間、ほとんど知られることは無かった。それを何とか世に出そうとポール丸山氏は今回の原作『満州・奇跡の脱出』の元となった英語版『Escape from Manchuria(満州からの脱出)』を6年がかりで書き上げ、2010年3月にアメリカで出版されている。この本を書こうとされたきっかけは、あの「命のビザ」で知られる杉浦千畝のご子息の講演をアメリカ国内で聞く機会があり、父邦雄氏らの知られざる秘話を世に出すには、そのことを知る自らが書くしかないと思われたからであったと言う。このポール丸山氏と当方が交流を持つようになったのは、まだこの原作を書かれている頃の2009年（平成21年）のことであった。あの羽田澄子監督作品の映画『嗚呼、満蒙開拓団』を岩波ホールでご覧になったポール丸山氏の妹であるマリアン真理子さんが、その会場入口に置かせて頂いていた満蒙開拓平和記念館の建設への協力呼び掛けチラシを手にとられ、事務局連絡先として書かれていた当方の所にお手紙をお送り頂いたのがきっかけであった。しばらくしてから、マリアンさんの仲立ちにより、アメリカ在住のポール丸山氏とメールでのやり取りをするようになり、以降、共に旧満州のこと等についての情報交換等を重ねてきた。そのポール丸山氏のご家族、友人等と共に来日し、まだ建設準備段階であった阿智村内の記念館建設予定地を訪問されたのは東日本大震災発生からまだ間もない2011年5月のことであった。この時、まず丸山邦雄氏の実家のあった現在の飯山市にある山村、旧富倉の里を当方の案内により訪ね、その実家跡地に立ち、近在のご親戚等にもお会いになられている。その2日後には阿智村を訪問され、建設は具体化していたもののまだ更地状態であった記念館の予定地にも立たれている。その際には、阿智村内にて記念講演も行って頂いており、以降、ほぼ毎年のように来日、ご来館頂いているも、その都度、阿智村内や飯田市内の複数の高校などでも講演をして頂いているところである。直近では昨年11月にもご弟妹等と共にご来館頂いており、この際には直前に上海でのこのドラマの撮影現場を訪ねて主役の内野聖陽さんらを激励、またご来館後にはあのドラマのラストシーンでも出てきたご自身らの引き揚げ港であった佐世保の浦頭港を実に70年ぶりに訪問される等しておられる。

2. ドラマの実現まで

このように当記念館とも深い交流のあるポール丸山氏といつも話していたこと、それはこの知られざる戦後秘話をもっと多くの人に知って頂きたいということであった。勿論、平成25年4月に開館した当記念館の中でも、丸山邦雄氏らの活躍については展示として取り上げたことは言うまでもない。とは言え、まだまだ知名度の低い小さな当記念館での展示程度ではとても周知化は無理なことであり、やはり映画またはテレビドラマ等で取り上げてもらうのが一番である。当方も、記念館や満蒙開拓の取材等で会ったテレビ局関係者等報道関係の皆さんにもこの戦後秘話を紹介し、是非どこかで取り上げて欲しいと要請することに努め続けてきた。しかし、なかなかそれが実現されることはなかった。その理由はやはりこれまで知られていない戦後秘話であり、それが本当の実話であったこと等を実証するには相当の裏付け調査等が必要であり、それは至難のことであったからと思われる。そして、それをやった上でのことであろうも、ポール丸山氏ご本人から「NHKがドラマで取り上げる方針で内部で動いているようだ」というオフレコ話しをお聞きしたのが昨年春頃のこと。そして、しばらくして、NHKの担当ディレクターの方から私の所に「ポール丸山さんからのご紹介で」ということで電話が入り、「ドラマ化が決まり、その主役を務める俳優さんが記念館に行ってみたいと希望されているので内々で訪問したいが」とのこと。その時は「その俳優はどなた？」などとお聞きすることも野暮と憚れ、特にはお聞きしなかったものの、その後で主役を務められるのが内野聖陽さんであると知らされた。人気俳優である内野聖陽さんが主役を務めること、またNHKが全国放送でドラマ化すること等からして、これは大きな反響を呼ぶこととなること間違いなしと確信した次第であった。昨年7月、内野聖陽さんはディレクターの方と共に高速バスで阿智村へと来られ、記念館を訪問されている。館内展示を詳しくご説明し、またちょうどその日に行われていた元満蒙開拓団員の「語り部」の会にも出席され、熱心に語り部のお話に耳を傾けられていた。この記念館への訪問はとても印象的であったようで、ドラマ放映に併せて発行されたムック本『満州・どこにもない国』の主役インタビューの中などでも記念館訪問の時のことに触れられている。ご来館時にも本当に熱心に質問等され、その真摯な姿勢に、間違いなくこのドラマは良い作品になると確信したところであった。そしてその通り、放送されたこのドラマはご覧になった皆さんの多くが「良い作品であった」と賞賛される場所となった。勿論、前・後編2話だけのドラマということで、原作からはやや削られた部分等もあるもそれは仕方のないところである。しかし、原作にも極めて忠実な作品であったと思う。それは原作者のポール丸山さんもおっしゃられていることである。

3. ドラマ登場者等を巡って

かくして好評を博したこのドラマ、ご覧になった旧満州からの引揚者の方などからも、私の所に届いた感想として、「当時、そんな時代背景があったなどとは知らなかった」、「自分たちがどうしてこの葫蘆島（ころとう）という港から引き揚げてきたのか、今回のドラマを見て初めて判った」という方々も少なくない。元満蒙開拓団員であった私の母もこの葫蘆島からの引き揚げであったが、母にしても、あるいはこの葫蘆島から引き揚げてきている多くの満蒙開拓団員の皆さん等も、この葫蘆島が開かれた経過や、ましてや丸山

邦雄氏らの活動のことなどは全く知る人はいなかった。勿論、私自身にしても、ポール丸山氏との交流が始まるまではこの戦後秘話を知ることは全く無かった。しかし、ポール丸山氏との出会いを通じてその戦後秘話を知る中で、我が母が生きて日本に引き揚げて来られたのも丸山邦雄氏らの活動のお陰であり、それにより結果として私も生まれることが出来たわけである。いわば「命の恩人」でもある丸山邦雄氏らの活動の史実をより多くの人たちに知ってもらうことのお手伝いをする義務が私にはあると思い、以降、そう努めてきた。勿論、その甲斐あってとは言えるはずもないも、今こうしてドラマとして世に出たことに本当にホッとしているところである。そして、誰よりもホッとされているのは、このドラマの原作となる『満州・奇跡の脱出』を6年がかりで書き上げ、これが更に世に出ることを願い、熱心に活動されてきたポール丸山氏ご自身でもある。その熱意こそがこのドラマを世に出した一番の原動力であったことは言うまでもない。

ドラマでの主人公であった丸山邦雄氏は戦後は母校であった明治大学で教壇に立たれる等された後、1981年（昭和56年）10月に富士山麓にあった別荘で78歳の波乱に富んだ生涯を終えられている。これを看取られた妻のメアリー万里子さんも、その10年後の1991年3月に日本国内で亡くなられている。ドラマで妻役を演じた木村佳乃さんも綺麗な方であるが、同様に写真で見るメアリー万里子さんも聡明でお綺麗な方である。私は残念ながらご生前の丸山邦雄氏にはお会い出来なかったものの、実は当時、丸山氏は我が飯田にも来られている。昭和21年3月、旧満州から日本に潜入した丸山氏らは様々な邦人救済活動に取り組んでおり、政府要人に会ったり、NHKラジオでも全国放送で呼び掛けたり、また全国各地に講演等にも出かけている。その中で、昭和21年4月始めには長野県内各地でも講演会を開催しており、4月3日には飯田市内の追手町国民学校の講堂を会場として丸山邦雄氏らが講演会を開くという当時の古い地元新聞記事が残されている。全国で最も多くの開拓団を送出したこの飯田・下伊那地方だけに、渡満した親族や知人等の消息を心配する多くの関係者等が聴講していたものと思う。その頃、我が母はまだ新京（現長春）の避難民収容所で我が子を失った失意の中で暮らし、父は終戦直前の「根こそぎ動員」により召集された後、シベリアの捕虜収容所で明日をも知れぬ日々を送っていた頃でもあった。丸山邦雄氏らの活動が無ければ母らの引き揚げはもっと遅れ、あるいは命も危うかったかも知れない。多くの邦人引き揚げに尽力された丸山氏ら関係者の活動に改めて深く謝意を表すところである。

生前の丸山邦雄氏にはお会いできなかったものの、3人の救済代表団のメンバーのうち、最もお若かった武蔵正道氏には当方も松本でお会いしており、親しくお話をお聞きしている。確か2008年（平成20年）のこと、長野県内の葫蘆島からの引き揚げ関係者により結成されている「信州葫蘆島の会」（当時の会長は穂苅甲子男元松本日中友好協会会長）が開催した松本市での講演会にお越しになった武蔵氏に、母親が葫蘆島からの引き揚げということで同会役員の末席を汚していた当方も、講師控室で親しくお話させて頂くことが出来た。残念ながら、武蔵氏はその2年後、2010年に89歳で亡くなられているも、武蔵氏はこの戦後秘話をお書きになった『アジアの曙・死線を越えて』という本を出版されており、今回のドラマ作成の中でも役立てられていると聞く。この本も、またドラマの原作『満州・奇跡の脱出』も是非一度は読んで頂きたい作品である。

4. 葫蘆島からの引き揚げなど

ところでドラマにも出てきた引き揚げ港の「葫蘆島」（葫芦島とも表記。中国語で「フールータオ」）、旧満州からの引揚者の多くの皆さんにとっては懐かしい地名である。この葫蘆島は現在は遼寧省の海岸に位置する「地級市」で、総人口は282万人、うち市区人口は99万人と言うから、規模的には平均的な地方小都市である。この葫蘆島、引き揚げ当時は「葫蘆島」と言う港自体はあったものの、当時は葫蘆島市とは言わず錦西市と呼ばれる市の中にあった。「葫蘆島」とは「ひょうたん島」の意味で、ひょうたん型の半島であったところから「葫蘆島」の名が付いたそうである。私も旧満州からの引き揚げを扱った飯島達雄氏という写真家の写真集で、この葫蘆島の上空からの写真を見ており、確かにひょうたんのような形をしている。この葫蘆島は明・清の時代からの古い歴史のある町で、この葫蘆島にかの東北軍閥張作霖の子・張学良が港湾を建設し独自で鉄道（満鉄とは異なる別の鉄道であった）を敷いたことから近代の発展が始まっている。水深約9mと大型船も着岸できる港で、また中国東北部では貴重な不凍港であり、また海浜リゾートとしても知られていたと言う。1932年からは満州国の一部となり、日本の陸軍燃料廠がこの錦西に石油精製工場を建設するなど、石油化学・軍事・港湾の拠点として開発が進んだ。また、第二次大戦後の国共内戦中の三大戦役の一つ「遼瀋戦役」（1948年秋）で敗退した蒋介石の国民党は瀋陽方面から撤退し、葫蘆島から海上へ脱出し台湾へと去り、東北部はすべて共産党の支配下に置かれることとなった。この葫蘆島が在満邦人の引き揚げの舞台となったのは、ここが国共内線の中でアメリカが支援していた国民党の最後の東北地方(旧満州)での拠点港であったことに拠る。GHQと国民党軍の主導により行われた旧満州からの引き揚げは主には米軍艦艇(主にはLST=戦車揚陸艦)により行われている。

ところで、戦後の旧満州など外地からの引き揚げ者は、日本国内の佐世保、博多など全国17ヶ所の「引き揚げ港」に引き揚げてきている。戦後の外地からの引揚者は復員軍人含めて約660万人、そのうち軍人軍属が約半分、後半分が一般人であったと言う。「引き揚げ港」であると言うことは厚生省の引揚援護局の出張所が置かれていたということであり、ここで引揚者の帰国手続きや疫病などの衛生検査、後には思想検査なども行われていたと言う。その「引き揚げ港」17港は、浦賀、舞鶴、呉、下関、博多、佐世保、鹿児島、函館、大竹(広島県)、宇品(広島県)、田辺(和歌山県)、唐津、別府、名古屋、横浜、仙崎(山口県)、門司、戸畑である。この中で引揚者数が多かったのは、判っている範囲では、多い順に佐世保(浦頭)約139万6千人、博多約139万2千人、舞鶴約66万4千人などとなっている。私の母が引き揚げてきたのは広島県の大竹港でここには約41万人が引き揚げてきている。戦後の引き揚げ港として有名なのは「舞鶴」であるも、ここが有名になったのは、シベリア抑留からの帰国者の引き揚げ港はほとんどここであったこと、と言うよりは引き揚げ港として最後まで残っていたのはこの舞鶴港だけであり、また「岸壁の母」として映画や歌で知られたことも大きい。なお、在満邦人約105万人が引き揚げたとされる葫蘆島からの引き揚げ船の多くは前記通り米軍艦艇であったも、一部には戦火を生き残った旧日本海軍の艦艇等も使用されており、その中には「奇跡の幸運艦」として知られた駆逐艦「雪風」や後に改造され南極船として活躍した「宗谷」なども含まれていた。

5. 葫蘆島を訪問して

ところで、ドラマにも出てきた引き揚げ港の葫蘆島、私も一度だけであるが訪問している。2006年(平成18年)6月、葫蘆島現地で中国側主催の「日本人送還60周年記念式典」という記念事業が開催され、日本側からも主には全国各地の日中友好協会や中国との関連のある諸団体等からの訪中団が参加、当方もその一員としての訪問であった。この時の式典、大変立派なもので日本側代表団の団長は村山富市元首相、中国側からは中国の外相(外交部長)などを務めていた唐家せん(とうかせん)氏などの顔も見えた。また、この時の式典の一環として葫蘆島港近くの丘の上で「平和公園」建設起工式が行われ、そこには「日本僑俘遣返之地」と書かれた横長の白い記念碑が建てられていた。しかし、その記念碑の裏側に回ってみると、何故か真っ白に塗られていた。また、この時の起工式の会場の丘の上の周りがある、更に小高い丘の上に登れば、その眼下には当時日本人たちが引き揚げた「葫蘆島」の港そのものを一望出来るはずであったが、そこには一切登ることは出来なかった。実は現在の葫蘆島港は中国海軍の軍港であり、一般人は一切入ることも出来ないし、丘の上から見下ろすことも出来ないとのことであった。また、ここよりはやや離れた寂しい海岸沿いにはやはり「日本僑俘遣返之地」と書かれたもう一つの縦長の引き揚げ記念碑も建てられており、この記念碑の裏側も碑文があった部分はやはり全て塗りつぶされていたのは不可解なことであった。

この式典の翌日早朝、古くからの友人であり現在は長崎大学の助教である南誠氏と2人でタクシーをチャーターし、葫蘆島郊外の農村にある「茨山(いばらやま)」という小高い丘を探しに行った。そこは引き揚げ当時、この葫蘆島まで南下してきたものの、ここで力尽きて亡くなってしまった日本人達を葬ったという丘である。残留婦人三世でもあり中国語の堪能な南氏が現地の人などに聞いて回ってくれて、ようやくその「茨山」に辿り着くことが出来たものの、当時、日本人を葬ったような墓地やその形跡等を残すものは何も見つからず、ただただこの「茨山」と呼ばれる丘に向かい手を合わせるばかりであった。

この2006年に葫蘆島に行った頃にはまだポール丸山氏との交流は始まっておらず、ましてやまだこの頃にはこの葫蘆島が開かれた経過の裏側に丸山邦雄氏らの命懸けの活動があったという戦後秘話なども全く知らずにいた頃であった。その訪問からもう12年にもなる。今回のドラマを見て、いつかまた葫蘆島を訪ねてみたいものと思う次第である。

(てらさわ・ひでふみ：満蒙開拓平和記念館 館長、本会理事)

満蒙開拓平和記念館の感想

水越景人

満蒙開拓団について私は、記念館を訪れるまでは、「国策で満州に送られた日本人の移民がいて、戦後日本に帰国できずに大変な思いをした」程度の知識しかありませんでした。記念館を訪れることでその前提が大きく覆った、という訳ではありませんでしたが、時代背景から当時の生活、戦後の開拓団、中国残留孤児を巡る日中関係まで、網羅的に知ることが出来、とても勉強になりました。

展示の内容はとても豊富で、特に開拓団の、当時の情勢に振り回された被害者としての側面だけでなく、侵略国の加害者としての側面、そして戦後の日中関係と絡めた、満州と開拓団にかかわる人々のその後についてしっかりと説明していたことが非常に印象的でした。

その中で気になった点があるとすれば、展示の中に当時の満州の人々からの視点から見た開拓団の姿がなく、また彼らとの交流についても触れられていないため、開拓団と現地の人々との関係性がよく理解できなかつたということです。中国の人々の側から見た開拓団、そして残留孤児についての意見が分からなかつたことは残念でした。しかし、限られたスペースの中で周恩来の「日本の一般国民もまた日本の軍国主義の被害者だ」という言葉を紹介していることは、中国側から見た日本の罪とそれに対するゆるしということを考える上で非常に良いことだと感じました。

他には、館内で使われている言語が日本語のみであるという点も気になりました。費用対効果を考えると多言語対応をする必要に欠けるということはもちろん正しいのですが、日中の歴史にかかわる記念館であることや、日本語能力に乏しい中国の方々が訪れる可能性を考えると、中国語での展示説明資料や音声ガイドがあればより良いように感じました。

満蒙開拓団の歴史を通して私が特に大きく感じたものは、時代の大きな流れというものに対する時の、普通の人々の無力さというものです。満蒙開拓団の人々を含めた当時の日本人は、国に従って、身近な人のために自身の職務を果たす、普通の人々だったように感じます。しかし歴史の流れの中で、彼らは意図せずして中国、満州を含むアジア諸国に対する加害者でありながら、自国の軍国主義の被害者でもあるという、難しい立場に追いやられてしまったような印象を受けました。

私は、満蒙開拓団の悲劇だけを紹介するのではなく、当時の日本も含めたその加害者としての立場を直視した記念館の展示を非常に真摯に感じました。自身の歴史の負の側面を受け入れ、相手の意見、立場を学んでこそ、正しい平和の形を模索することが出来るように思います。そして、満蒙開拓平和記念館の名前に象徴されるように、満蒙開拓団の歴史から、相互理解を通じた日中間の平和を続けるために、歴史を学ぶ必要性を感じました。

(みずこし・かげと：上智大学外国語学部ドイツ語学科3年、木村護郎ゼミ生である)

満蒙開拓平和記念館を訪れて

梯 頼子

3月17日・18日にゼミ合宿で長野県阿智村を訪れました。私の地元（徳島県）と街並みが似ていて、ふだん人の多い東京で生活している自分にとってはとても居心地がよかったです。ウィンターナイトツアーでは満点の星空を見ることができ、朝市では地域の人々の生活を体感することができました。食べ物も美味しくとても良い合宿でした。

中でも特に印象的だったのは、満蒙開拓平和記念館を見学したことでした。高校では世界史選択で、大学でも外国語学部でドイツ語を専攻しているので、正直なところ満州については、第二次世界大戦時に日本からたくさんの人々が満州に渡ったということと、中国残留孤児が存在することぐらいしか知りませんでした。そんな自分にとって、記念館で展示されていることの多くが初めて知ることでした。そして、当時の政策によって満州に渡り、二度と帰って来ることのなかった人々がたくさんいるという事実が何よりもショックでした。記念館見学の後、引き揚げ者が戦後、苦勞して開拓した土地も案内していただきました。

このような見学を通じて、対外的なことに目を向けられがちな日中戦争に関して、日本国内にも被害者がたくさんいるという事実にも目を向けなければならないのではないかと思います。また、海外に目が向けられがちな問題について、日本国内にもあまり知られていない問題がたくさんあるということは、現代の日本社会において、所得格差・貧困をはじめとするさまざまな局面において言えるのではないかと考えています。

(かけはし・よりこ：上智大学外国語学部ドイツ語学科3年、木村護郎ゼミ生である)



(左から木村護郎先生、水越さん、梯さん、ドイツからの留学生)

昭和天皇の戦争責任と日本人の加害責任認識の欠如

野崎 朋子

日本とヨーロッパ 皇室/王室観の違い

6年前、即位60周年を迎えた英国・エリザベス女王。その祝賀行事をBBCが中継していた時、国会議事堂前で議員らが「君主制反対」の横断幕を掲げていた。日本との余りの違いを痛感した瞬間である。日本で同様のことをしたら、たちまち右翼やネット右翼が攻撃するだろう。命を狙われる可能性も少なくない。

「天皇の戦争責任はあると思う」と発言した本島等・長崎市長が右翼団体幹部に銃撃され、重傷を負った1988年12月の事件は、翌月からアメリカの大学院で新聞ジャーナリズムを学ぶことになっていた私には大きな衝撃だった。「しかし、日本人の大多数と連合国軍の意志によって責任を免れ、新しい憲法の象徴になった。私どももそれに従わなければならないと解釈している。」と続くのだが、マスコミ各社が「天皇の戦争責任はあると思います」という部分だけを強調する形で報道した責任は重い。しかし、全て報道したとしても、天皇の戦争責任に言及しただけで、犯人には十分な狙撃理由になったのだろう。

王室を堂々と批判できる点では、他のヨーロッパ諸国でも同じである。数年前、ノルウェー人の友達と話していた時、「ノルウェーでは多くの人が君主制に反対している」と言っていた。実際は君主制支持の国民のほうが多いようだが、皇太子の結婚時に見られたように、時には王室一家が厳しい世論にさらされることもある。

日本と英国、ノルウェーの違いを持ち出したのは、公の場での天皇・天皇制批判はタブーというこの国は真の民主主義国ではないことをはっきりさせたからである。例えば外で私が天皇制を話題にするのは、アメリカ人の友達を交えて英語で話す時に限られる。あるいは隣の席が離れていて、こちらの会話を聞かれない時にしか批判的なことは言えない。因縁を付けられるかも知れないという恐怖で自主規制してしまうのである。

「君が代」問題

日の丸掲揚や君が代斉唱に反対する人たちを異端視・白眼視・迫害する日本人が少なくないことも、私にはストレスになっている。阪神タイガースファンの友達が阪神甲子園球場で君が代斉唱時に座っていたら、隣の親子連れにじろじろ見られたと聞いて、昨年、黒人への暴力に抗議してアメリカンフットボール選手達が国歌斉唱時に起立しなかった米国との違いを改めて感じた。トランプ大統領が「クビか出場停止にすべきだ」と言ったことに対し、上位チームで構成されるNFLのロジャー・グデル・コミッショナーは「このような分断をあおるコメントは、敬意を不適切に欠いている」と批判した。

広島で被爆した栗原貞子が「犯罪の旗」と表現した日章旗（「旗」、1975年）、そして天皇を称える「君が代」。特に、戦後も君が代の歌詞を変えずに解釈を変えるという、安倍内閣による9条の解釈改憲のようなことがまかり通っているのは納得できない。

天皇は「大君」であって「君」ではない、などという人もいるが、辻田真佐憲著「あなたの知らない『君が代』」（幻冬舎plus、2015年）には、戦後も「君」は「象徴天皇」を指し、「愛しいあなた」ではない、とはっきり書いてある。その根拠として、1950年に天野貞祐文部大臣が、1987年には西崎清久同省初等中等教育局長が、それぞれ「君」は「象徴天皇」にあたりと説明したこと、また「国旗国歌法」が成立した1999年には、当時の小

淵恵三内閣によって「君」は「象徴天皇」と解釈するのが適当であるという見解が示されたことを挙げている。

1999年当時のことをもっと詳しく見てみると、まず、6月11日の国旗・国歌法案の閣議決定で「君が代」の「君」とは「日本国及び日本国民統合の象徴である天皇を意味する」との統一見解が示された。そして7月21日、衆議院内閣委員会において、小淵総理大臣は次のように答弁した。「古歌君が代が明治時代に国歌として扱われるようになってからは大日本帝国憲法を踏まえ、君が代の『君』は、日本を統治する天皇の意味で用いられました」。更に「終戦後、日本国憲法が制定され、天皇の地位も戦前とは変わったことから、日本国憲法下においては、国歌『君が代』の『君』は日本国および日本国民統合の象徴であり、その地位が主権の存する日本国民の総意に基づく天皇のことを指しており…」と続けた。

つまり天皇は「主権者」から「象徴」に変化したものの「君」が天皇を指すという解釈は戦後も揺るがなかったのであり、「君が代」が天皇を称える歌に変わりはないのである。そのことに違和感を覚えるからこそ抗議の声をあげる人たちへの直接・間接的暴力、そして公立校教員への懲戒処分が止まらない。こんな現状を許している国が果たして真の民主主義国家だろうか。

天皇が、この状況に責任があるわけではない。2004年秋の園遊会で、米長邦雄・東京都教育委員の「日本中の学校で国旗を掲げ、国歌を斉唱させることが私の仕事でございます」という発言に対し「やはり、強制になるということではないことが望ましい」と応じたのは、「自主的にやってほしい」という意味だろう。もっと踏み込んで「反対する人に強制するのは望ましくない」と言ってほしかったけれど、政治的発言と見なされるから無理、と言われれば仕方ない。

被爆者と昭和天皇

今上天皇には戦争責任は問えない。しかし、昭和天皇にも戦争責任がなかったという日本人が結構多いのには驚く。例えば、関西のある都市の被爆者の会会長に一昨年、原爆投下に至るまでの昭和天皇の（戦争）責任の有無を尋ねたら「責任はないと思います。何もご存知なかったのですから」との答えだった。この会長が例外でないことを2015年8月に訪れた広島でも思い知らされた。平和学習集会の参加者から「被爆者の間で天皇の責任を問う声はこれまでほとんどあがってこなかった」と聞き、失望した。広島と言えば、天皇制批判や日本の加害を詠んだ前述の栗原貞子さんのイメージが強かったから…。

被爆者は昭和天皇の戦争責任に触れず、多くの日本人は「被害」の視点でしか原爆を語らない現実には閉塞感を感じていた私は、昨年、カナダ在住のサーロー節子さんが、原爆を被害と加害の両面から語るのを見て、一筋の光が差し込んだ気がした。13歳の時に広島で被爆し、ノーベル平和賞受賞のICAN核兵器廃絶国際キャンペーンに関わってきた反核活動家である。

8月12日放送のNHKBS「核なき世界へ ことばを探す」で、アジア系の女子高校生に「日本は多くの罪のないアジア人を殺した。あなたの受けた被害とどちらがより深刻か」と問われたのに対し「殺されるということに違いはない、それが中国人、日本人、朝鮮半島の人のおいずれであっても。ヒロシマ、ナガサキについて語る時にとっても大切なのは、日本は被害国であり、加害国でもあったということに心を留めておくこと」と答えたのである。

こういう被爆者がもっと存在感を増せば、日本が侵略したアジアの国々の人々も、核兵器は絶対悪という考え方にいっそう共感してくれるのではないか。原爆投下を招いたそも

その責任は日本にあり、ヒロシマとナガサキがなかったら自国の犠牲はもっと増えていたと考えるアジアの人々には是非、上記のサーローさんの言葉を紹介したいと思う。

戦争責任についての昭和天皇の自覚

昭和天皇自身が戦争責任や原爆投下について語った1975年の記者会見は今でも忘れられない。日本記者クラブによる、初の公式記者会見だった。

(ザ・タイムズ記者・中村康二) 陛下は、ホワイトハウスにおける『私が深く悲しみとするあの戦争』というご発言がございましたが、このことは、陛下が開戦を含めて、戦争そのものに対して責任を感じておられるという意味と解してよろしゅうございますか。また、陛下は、いわゆる戦争責任について、どのようにお考えになっておられますか、お考えをお伺いいたします。

[天皇] そういう言葉のアヤについては、私はそういう文学方面はあまり研究もしてないので、よくわかりませんから、そういう問題についてはお答えができません。

(中国放送記者・秋信利彦) 戦争終結に当たって、広島に原子爆弾投下の事実を、陛下はどうお受けとめになりましたのでしょうか、お伺いいたしたいと思います。

[天皇] 原子爆弾が投下されたことに対しては遺憾には思っていますが、こういう戦争中であることですから、どうも、広島市民に対しては気の毒であるが、やむを得ないことと私は思っています。(1975年10月31日、皇居)

これを聞いた茨木のり子は「四海波静」(「ユリイカ」1975年11月号)で次のように批判する。

思わず笑いが込みあげて
どす黒い笑い吐血のように
嘔きあげては 止り また嘔きあげる
三歳の童子だって笑い出すだろう
文学研究果たさねば あばばばとも言えないとしたら

この詩は、昭和天皇の「四方の海 みな同胞(はらから)と思う世になど波風(あだ波)の立ちさわぐらむ」を連想させる。(もとは1904年の明治天皇の歌で、1941年9月6日の御前会議で昭和天皇が引用。その際、「波風」を故意に「あだ波」と変えて詠んだという説もある)。

まるで他人事のように戦争責任を語る天皇へのほとぼしる憤りが結実したのが、この詩だと思ふ。記者会見から1カ月もたたないうちに発表されたのだから。茨木のり子は、天皇だけでなく、その発言を批判しない記者たちにも容赦がない。今なら、こんな詩を発表すること自体、作者も出版社も命がけとっていいだろう。この頃はまだ、公に天皇を批判できたのだと思ふと暗澹たる気持ちになる。

戦争指導者としての昭和天皇

昭和天皇には戦争責任はなかったという、一般市民への「刷り込み」は戦後まもなく始まった。日本国憲法の解説のために、1947年8月2日に文部省が発行した中学1年生用社会科教科書「あたらしい憲法のはなし」には、こうある。

こんどの戦争で、天皇陛下は、たいへんごくろうをなさいました。なぜならば、古い憲法では、天皇をお助けして國の仕事をした人々は、國民ぜんたいがえらんだものでなかったのです。國民の考えとはなれて、とう／＼戦争になったからです。そこで、これからさき

國を治めてゆくについて、二度とこのようなことのないように、あたらしい憲法をこしらえるとき、たいへん苦心をいたしました。ですから、天皇は、憲法で定めたお仕事だけをされ、政治には関係されないことになりました。

しかし、昭和天皇が「何も知らなかった、知らされていなかった」というのは事実に対する。例えば1931年9月の中国東北部への侵略「満州事変」を、出先の関東軍が引き起こした際、特別の「勅語」で、侵略を「自衛」の行動として正当化したうえで、「急速に相手の大軍を破って勝利したのは大変立派だ。今後さらにがんばって、朕の信頼に応えよ」とほめたたえた。この事実からも、天皇と軍部が全権を掌握し、侵略戦争を開始・拡大していった事実が浮かび上がる。

山田朗著「昭和天皇の戦争」（岩波書店、2017年）によれば、「昭和天皇実録」（宮内庁、2015年）は、戦争指導者としての天皇像を極力排除するため重要な部分を省略しており、防衛省戦史研究センターに所蔵されている旧軍の一次史料に記された天皇の発言と、同じ典拠で書かれた「実録」の記述とでは、まるで違う印象を受ける例がいくつもあるという。

例えば東部ニューギニアをめぐる日米両軍が激戦を繰り広げていた1943年8月5日、参謀総長杉山元が戦況を奏上した時、「米軍をびしゃりと叩くことはできぬか」、「どこで決戦をやるのか」と天皇が迫った（真田穰一朗日記「杉山メモ」）とあるのに対して、「実録」には「杉山に謁を賜（たま）い、奏上を受けられる」といった記述しかない。

それだけではない。「実録」は、天皇出席のもとに行われた1943年5月31日の御前会議決定で、占領したマライ、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、セレベスを「帝国領土と決定」し「重要資源の供給地」としたことには一切触れていない。この決定は外務省編「日本外交年表拉主要文書下巻」（原書房、1965年）ですでに明らかにされているにもかかわらず...

いよいよ戦局が悪化した1945年の2月14日、近衛文麿首相が「戦争終結の方途を講ずべきものなりと確信する」と天皇に言上したところ「もう一度、戦果を挙げてからでない、なかなか話は難しいと思う」と答えたという話は「一撃講和」として有名である。

上記「実録」は「難しい」のは陸軍の人事刷新であって停戦受け入れではなかったと読ませたいようだ。しかし、昭和天皇が戦前、戦中の出来事に関して1946年に側近に対して語った談話をまとめた記録「昭和天皇独白録」（1990年に『文藝春秋』誌上に公表）には「近衛は極端な悲観論で、戦を直ぐ止めた方が良くと云ふ意見を述べた。私は陸海軍が沖縄決戦に乗り気だから、今戦を止めるのは適当でない」と答へたとある。つまり「難しい」の主語が何であろうと、天皇が近衛による提案・即時停戦を拒否したことには変わりはない。

資料の選択が恣意的な「昭和天皇実録」においてさえも、天皇が臨席して軍事作戦などを決める大本営会議が少なくとも19回行われたことや、同会議に準じる研究会（天皇に対する報告会）が21回開かれていたことが記されている。この事実を前にして、天皇が軍事戦略決定を知らなかったという言い逃れはできない。もっとも、軍部から戦果を誇大に、損害を矮小化して伝えられていたのは事実だが。

以上のことから、1931年の満州事変から中国各地への侵略拡大、それに続く太平洋戦争、敗戦という全過程の現場にすべて立ち会い、決定に参加してきた人物は昭和天皇以外にいない。天皇以外の首相、陸海軍の責任者など、どの指導的役職をとっても、いろんな人が務めてきたのである。

これに対し、閣僚は戦況について蚊帳の外に置かれていた。真珠湾攻撃時の首相は東條英機だったが、連合艦隊がハワイにひそかに出発した段階でも伝えられず、閣僚たちが知るのには攻撃が終わってからだった。東條が「ミッドウェー海戦の敗北を知らなかった」と井野碩哉（東條内閣の農林大臣）に、戦犯として共に収容されていた時に語ったという話が事実なら、東條英機は戦争遂行の「飾り」にしか過ぎなかったわけで、旧日本軍の最高指揮官・大元帥だった天皇の戦争責任が改めて問われることになる。

日本人の戦争責任の取り方

この国の戦争責任の取り方が、米国主導の極東国際軍事裁判（東京裁判）による28名の「A級戦犯」の処刑、そして連合国7カ国が独自の法令に則り各地で行った軍事裁判（B、C級戦犯）で幕引きとなったのは、ドイツが官僚の責任を徹底的に追及しているのと対照的である。ゲシュタポとSS（ヒトラー親衛隊）については時効がないために、例えば2012年に、90歳前後のアウシュビッツ収容所の元看守3人が逮捕された。これに対し、日本では連合国によるいずれの裁判でも警察と官僚機構の戦争責任は一切問わなかったどころか、戦後も引き続き政界・教育界や警察機構での「活躍」を許したのである。

満州国国務院実業部総務司長、総務庁次長などの官僚職や、東條英機内閣での商工大臣などを経験した岸信介は、A級戦犯被疑者として巣鴨刑務所に拘置されたものの不起訴となり、公職追放後に政界に復帰し、1957年に首相の座に就く。戦後、吉田内閣で文部大臣に就任した大達茂雄は、旧内務省の出身で、日本が占領したシンガポールの市長や内務大臣などを務め小磯内閣では閣僚だった。岸同様A級戦犯容疑で巣鴨拘置所に囚われたが、不起訴となった。敗戦時に内務大臣で、岸信介に近かった安倍源基は、A級戦犯容疑で一旦は逮捕されたものの、東條英機が絞首刑死した翌日、不起訴・釈放になった。初代の警視庁特高部長で、就任翌年（1933年）には、特高警察によって19人が拷問死しているにもかかわらず…。戦後は1954年、乱闘国会で成立した新警察法による警察行政の中央集権的一元化実現に力を注ぎ、旧内務官僚出身者を中心とする自民党右派で構成された同党の政務調査会治安対策特別委員会で活躍したのである。1958年には木村篤太郎らと新右翼団体「新日本協議会」を結成、代表理事を務めた。

東京裁判やBC級戦犯裁判には、このほか天皇や財閥の不起訴を初め、731部隊による生体実験や細菌戦などの戦争犯罪が免責され、朝鮮人の強制連行など植民地での犯罪行為が不問に付されたなどの欠陥もある。日本共産党は、天皇の戦争責任を追及する動きを見せたものの結局、国民の間には広がらなかった。徳田球一など幹部は、進駐軍を「解放軍」と錯覚し、日本を反共の砦と位置付けた米国によって公職追放されてしまったのだから。

BC級戦犯裁判終結間もなく48カ国と日本の間で調印されたサンフランシスコ講和条約（1951年）で、連合国は日本に対する賠償を放棄し、経済協力による「賠償」が進められたが、中国や韓国・朝鮮、台湾は講和会議に参加を認められなかった。その結果、日本人のあいだに「アメリカ相手に無謀な戦争をした」という認識は定着しても、中国との戦争で負けたことや朝鮮・台湾の植民地支配などについての認識は乏しいまま、戦後70年以上過ぎた。自分たちの手で戦争責任者を裁くこともなかった。

昨年11月出版された井上寿一著「戦争調査会 幻の政府文書を読み解く」（講談社現代新書）では、これまであまり語られなかった事実が明らかになっている。この調査会は、日本が敗戦に至った理由を調査するために1945年11月、幣原喜重郎内閣が立ち上げ、40回以上会議を開いたものの、1年弱でGHQによって廃止された。同首相は「大東亜戦争の原因及実相を明らかにすることは、之に関し犯したるが為に必要なりと考えられるが故に、内閣に右戦争の原因及実相調査に従事すべき部局を設置し、政治、軍事、経済、思想、文化等凡ゆる部門に亘り、徹底的に着手せんとす。」と、もとの内閣調査局案よりいっそう

踏み込んだほど意欲を見せていたにもかかわらず、次の吉田茂内閣は、GHQの廃止要請に大した抵抗もなく従った。

この調査会が中途半端に終わったのは実に惜しいと思う。極東軍事裁判の判決との乖離や、元軍人や戦争遂行に協力した技術者らの人選などについてGHQが懸念を示した時に、もっと踏ん張ってほしかったとか、調査会が十分機能したなら今のように歴史修正主義がはびこる日本社会にはならなかったかも知れない、などいろんな思いが湧いてくる。

伊丹万作の発言

締めくくりにふさわしいのは、一般市民の戦争責任について見事な考察を見せた、映画監督の伊丹万作の「戦争責任者の問題」だと思う。敗戦から1年後、「映画春秋」創刊号に発表されたもので、肺結核で亡くなる直前だった。

「多くの人が、今度の戦争でだまされていたという。みながみな口を揃えてだまされていたという。私の知っている範囲ではおれがだましたのだといった人間はまだ一人もいない。ここらあたりから、もうぼつぼつわからなくなってくる。多くの人はだましたものとだまされたものとの区別は、はつきりしていると思つていようであるが、それが実は錯覚らしいのである。たとえば、民間のものは軍や官にだまされたと思つているが、軍や官の中へはいればみな上のほうをさして、上からだまされたというだろう。上のほうへ行けば、さらにもつと上のほうからだまされたというにきまつている。すると、最後にはたつた一人か二人の人間が残る勘定になるが、いくら何でも、わずか一人や二人の智慧で一億の人間がだませるわけのものではない。

(中略)

少なくとも戦争の期間をつうじて、だれが一番直接に、そして連続的に我々を圧迫しつづけたか、苦しめつづけたかということを考えるとき、だれの記憶にも直ぐ蘇ってくるのは、直ぐ近所の小商人の顔であり、隣組長や町会長の顔であり、あるいは郊外の百姓の顔であり、あるいは区役所や郵便局や交通機関や配給機関などの小役人や雇員や労働者であり、あるいは学校の先生であり、といったように、我々が日常的な生活を営むうえにおいていやでも接触しなければならない、あらゆる身近な人々であつたということはいつたい何を意味するのであろうか。

(中略)

そして、もしも諸君がこの見解の正しさを承認するならば、同じ戦争の間、ほとんど全部の国民が相互にだまし合わなければ生きて行けなかつた事実をも、等しく承認されるにちがいないと思う。

しかし、それにもかかわらず、諸君は、依然として自分だけは人をだまさなかつたと信じているのではないかと思う。

つまり、伊丹万作は、全ての国民にあの戦争への責任がある、と言っているのである。抵抗を貫いた一部の人たちを除けば「一億総懺悔」するべきということだろう。

ただ、誤解のないように、私の考える「総懺悔」の意味は、この言葉を発したと言われる東久邇宮稔彦王首相のそれとはまるで違う。敗戦直後の同内閣は国民に対し「承諾必謹」と「国体護持」を説き、天皇制支配の維持に努めるとともに、一億総懺悔を主張し、天皇への敗戦の謝罪を唱えたのに対し、伊丹万作は、国民一人一人が戦争に加担した責任と向き合い、反省すべきだと言っているのだと思う。

日本人は、A級戦犯とBC級戦犯が裁かれたことであたかもアジア民衆への加害責任を取つたような錯覚に陥り、戦後の学校教育も原爆や大空襲や沖縄戦などもっぱら「被害」に焦点を当てて戦争の悲惨さを教えてきた。ベトナム反戦運動（1960年代後半～1970年代前

半)によって、やっと東南アジアでの日本の加害にも関心が向けられるようになった。例えば日本がベトナムに大量の米を供出させた結果、戦争末期に大量の餓死者が出たり、ジャワ(インドネシア)のスマランで、連合国民であるオランダ人女性を日本軍による抑留所から「慰安所」へ連行して強姦した事実などが一般の人たちにも知られるようになった。

しかし、学校ではまず、こういったことは教えないから、今でも日本の戦争責任について知識が乏しいまま社会に出る。そして、太平洋戦争中の東南アジアでの加害だけでなく、朝鮮半島の三一独立運動弾圧(1919年)や中国での平頂山事件(1932年)、南京虐殺(1937年)、重慶爆撃(1938年~1943年)など植民地化したり侵略した国々での殺戮、蛮行も、ほとんど知らないか、知っていてもネット上の偽情報を信じている場合が少なくない。

私には、米国とフランスの大学で教えている、それぞれアメリカ人とチュニジア人の友達がいる。彼らが言うには、日本人学生は、アジア太平洋戦争や日本の朝鮮半島支配が話題になった時に、中国や韓国からの学生とは対照的に、ほとんど知識がないために議論に入っていけないそうである。「日本人は自国の近現代史について、もっと学ぶべきではないか」と二人とも言う。どちらも日本びいきで、前者は数年日本に住んだ経験があり、後者も2回訪日したことがある。そういう親日派・知日派からの真摯な忠告には耳を傾けるべきだと思う。

日本は侵略戦争などしなかったとか、欧米と戦うことでアジア各国の独立を助けたなどと信じている人たちは、一度、現地を訪れ、歴史資料館・博物館に足を運んだらどうか。そこでは、日本による侵略の歴史を学ぶことができる。親日的と言われる国でもそうだ。現地の人々は、日本が彼らの土地で何をしたかを、学校やこういう施設で学ぶ。中国の南京大虐殺記念館や抗日戦争記念館などに難癖をつける人は、これら東南アジア各国の施設の展示も「偽物」と決めつけるのだろうか。

伊丹万作は上記「戦争責任者の問題」で、日本人の国民性を痛烈に批判している。

そしてだまされたものの罪は、ただ単にだまされたという事実そのものの中にあるのではなく、あんなにも造作なくだまされるほど批判力を失い、思考力を失い、信念を失い、家畜的な盲従に自己の一切をゆだねるようになってしまっていた国民全体の文化的無気力、無自覚、無反省、無責任などが悪の本体なのである。

このことは、過去の日本が、外国の力なしには封建制度も鎖国制度も独力で打破することができなかつた事実、個人の基本的な人権さえも自力でつかみ得なかつた事実とまったくその本質を等しくするものである。

そして、このことはまた、同時にあのような専横と圧制を支配者にゆるした国民の奴隷根性とも密接につながるものである。

一度だまされたら、二度とだまされまいとする真剣な自己反省と努力がなければ人間が進歩するわけではない。

敗戦後70年以上たった今でも色褪せない、日本人へのこの比類なき直言を改めてかみしめたい。

(のざき・ともこ：1955年東京生まれ。米国・シラキュース大学院修士課程修了。大学卒業後、特許事務所やフリーランスライターを経て留学。帰国後は国際会議・イベント等の会社勤務。2007年の訪中後、撫順の朝顔を全国に広げるのが「使命」のようになっている。)

方正県城西日本軍飛行場の顛末

曹 松先 石 金楷

1931年の“満州事変”以降、日本は中国の東北を占領するために、ハルビン東部の特殊な地理的位置にある方正県を戦略的要地とみなし、多くの軍事施設を建てた。特に1939年から1945年にかけて、方正県内には軍用飛行場が三か所も造設された。それらは、天門村陳家屯飛行場と会発村西海屯飛行場、方正町城西飛行場である。

1945年日本が敗戦した後、この3か所の日本軍の飛行場はすべてソ連の赤軍によって爆破された。

方正県城西日本軍飛行場は方正県城西大壕の西に位置し、県の稲作研究院の北部、徳善郷豊裕村の東部、丹陽山の東南部および李春屯西南部の広い地域に位置している。地理の座標で言えば、東経128°47′、北緯45°50′で、空港の敷地は延べ面積432万平方メートル(432ヘクタール)である。

趙家屯に住む85歳の目撃者趙国臣の話によるとこの地は、当時農民が先祖代々命の綱として平らに整備された肥沃な土地であったという。東側には方正県の町があり、その周囲には幾つもの村里があり、その中には家がちらほら建っていた。当時日本軍は、戦略上の必要性から、軍用飛行場建設名義で、この土地を強引に略奪し、家屋を焼き払って代価無しで占領した。農民たちは土地や家を失い、あてどなく離散した。

城西大壕の東側に住む66歳の于永和老人の記憶によれば、当時彼の父親は、日本が飛行場を建設する時、労働者として命懸けで働いた。そのために病気になり、働けなくなり、やっと危機的な状況から脱出できた彼の父親の話では、この飛行場は1940年の春から建設が始まり、1945年夏には本体工事がほぼ完成し、日本軍が使用し始めていて、絶えず飛行機の離着陸があった。飛行場の修理のために働かされた労働者の大半は、天津・唐山一帯から自動車で連れて来られた農民たちで、16歳から40代の若者たちだったがほんの一部に「勤労奉仕隊」という名目で飛行場建設に参加した現地の農民もいた。

毎日2千人近い労働者が鉄条網に囲まれ、警備の厳重な工事現場で労働を強いられ、毎日10～12時間働かされていた。少しでも怠けたりしたものなら、日本の工事監督にこっぴどく殴られたりした。一回の食事は、僅か200gのコウリャン飯だけで、どんぐり粉が混ざったトウモロコシ粉で作る円錐形の“ウオートー”(蒸しパン類)と野菜スープ一杯という時もあった。住む所は、葦で仕切られた飯場で、地面の敷物は豆殻と乱れた草が敷かれただけだ。冬は寒く、夏は湿ってじめじめしていた。こんな劣悪な環境の中で、毎日疲れ果てて倒れる者や病人が出た。病気で働けなくなると、余所者は工事監督に引きずられて犬小屋に放り込まれ、無残にも犬に食いちぎられて喰われてしまうか、飛行場の周りに一穴一穴深く掘った穴に生き埋めにされてしまった。他にも、車で川辺にまで引きずられ、松花江に放り投げ捨てられたりした。地元の者が病気になった時は家族に引き取らせ、代わりに他の者に働かせた。だが、数ヵ月後には彼らの大半も殴られて死んだり、疲れ果てて死んでしまった。そうすると日本人はまたしても車でよそから労働者を引っ張ってきて人手不足を補足するのだった。よその土地から連れて来られた労働者は生還せずすべてここで死んでしまった。方正県城西日本軍の飛行場は、無数の中国人の生命と血肉を積み

重ねて出来たものなのである。

1945年8月20日、ソ連赤軍は、燃料タンク2個と一部の滑走路を完全に爆破できずに残した以外は、エプロン・飛行機・指示塔・砲台・機械部品庫・油糧庫・備蓄倉庫・飛行機格納庫等の方正城西日本軍飛行場の地上施設をすべて破壊した。飛行場は廃墟と化した。

趙家屯に住む79歳の老人王金発の話では、子供のときから、ここは果てしなく草木が生い茂っていた荒野で、近くに住む子供たちがよくここに来て、壊れた飛行機に登ったり、使われない滑走路で遊んだりする以外はここへはほとんど来る人は居なかったという。その後、周辺の人たちは、飛行機の部品を取り外してお金にしたり、コンクリートの塊を拾ったり、廃棄された滑走路の残片を掘り起こして家に持ち帰り、豚小屋を造ったり、庭に敷いたり、垣根を作ったりした。更にその後は、近くの空き地を見つけて、荒地を少々開拓して、作物や野菜を少しずつ作る者も出てきた。

1959年、周辺の生産大隊と生産隊は社員を動員して大量のセメントの塊や石ころなどを整理し、広大な土地を開墾して農作した上、飛行場の東側に家を建て、20戸ほどの小さな村を増設、後に村は趙家屯と呼ばれる。1968年、方正県林業課が飛行場の南東部に造林のための苗圃を設けた。同年、県農業課は苗代の南側に方正県良種場を建設し、飛行場の正南に方正県の農場を造った。1971年、県教育課は、飛行場の南東に面する苗圃と良種場の間に方正県中学校を建立した。

1971年には、城西日本軍飛行場は、周辺の生産大隊と生産隊によって、一応農地に復旧された。飛行機の滑走路と施設の残骸はほとんど片付けられ、西側の中央部分だけが県武装部の射撃場として使用された。今では、射撃場もすでに廃棄され、水田に開発されて人々が請け負って耕している。だが土地の使用権は依然として県武装部にある。この土地はすでに一面農地になっている。未だ残っている飛行場の施設の周囲は、村人が居住していて、豚や牛、羊が飼われている。方正城西日本軍飛行場の開墾権利と土地所有権を持つのは、方正町慶豊村、方正町青天村、県林業局の苗圃、県農機局良種場、県農業局水稲研究院、松南郷向陽村、徳善郷豊裕村、徳善郷ニュータウン村、方正県三和園花苗基地など、十数の部門である。

現在、方正県城西日本軍飛行場には、地上より2.5m突出していて、直径6メートル、周囲19メートル、厚さ0.5メートルの、セメント構造物が二か所あり、(地下内部はすでに黒土で埋められている)飛行機燃料庫の痕跡がある。更には、2か所爆破された飛行機格納庫と一基のセメント構造の坑口がある。

2004年9月23日、方正県人民政府は、城西日本軍飛行場に「日本軍飛行場の遺跡」と記した標識を立てた。

(解説：本稿は、曹松先、石金楷両氏の中文原稿の翻訳である。曹さんは1955年生まれ。小学校の校長を経て現在、方正県華僑連合会副会長であり、民俗学の研究者でもある。石さんは1957年、ハルビン生まれ。2014年、夫人(残留孤児)と来日、都内に在住。日本残留孤児養父母連絡会事務局長である。黒竜江省社会科学院卒業生で中日関係史が専門で、中国で現在、小学校の教師である姜钰さんの日文訳がついていたが不十分であり、都内に在住の陳寛女史に協力を仰いだが、文責は大類にある)

方正县城西侵华日军机场建设始末

曹松先 石金楷

1931年“九一八”事变后，日本军国主义为实现长侵占中国东北的目的，把处在哈尔滨东部特殊地理位置的方正县当做战略要地，大量修建军事设施。特别从1939年至1945年，在方正县境内修建了3处军用飞机场。其中有：天门乡陈家屯飞机场、会发镇西海屯飞机场、方正镇城西飞机场。1945年日本投降后，这三处日军机场全部被苏联红军所炸毁。

方正镇城西侵华日军机场，位于方正县城西大壕以西，县水稻研究院以北，德善乡丰裕村以东，丹阳山东南，李春屯西南大片区域。地理坐标为，128°47”，北纬45°50”，机场总占地面积，4320000平方米（432公顷）。

据家住赵家屯85岁的目击者赵国臣老人讲，当年，这里是农民祖祖辈辈赖以生存的一片平整肥沃的土地。东面是方正县城，四周有一个个村屯，中间还有一些零零散散的住户。当时，日军以圣战需要，建军用机场为名，强行收缴土地，烧毁房屋，无代价占领。农民被迫失去土地，无家可归，流离失所。

家住城西大壕东沿66岁的于永和老人回忆，他的父亲当年就在日军建军机场时出过劳工卖过命。因为累出了病，不能干活了，才脱离了虎口。他听父亲讲，此机场自1940年春天开始修建，至1945年夏季，主体工程基本完工，日军以开始使用，常有飞机起降。修机场所用劳工大多数是从天津、唐山一带用汽车拉来的16岁至40岁的青年农民，一少部分是当地百姓以“勤劳奉仕队”的名义参与机场建设。每天有近两千人在四周架有钢丝网、戒备森严的工地上干肩扛人抬的重苦力活，一天要干10-12小时，稍有怠慢，就会遭到日本监工的毒打。每顿饭只给二两高粱米饭，有时给一个掺了橡子面的玉米窝头，一碗青菜汤。住的是用芦苇席搭成的工棚，地上铺的是豆秸和乱草。冬季寒冷，夏季潮湿，在这种极其恶劣的环境下，每天都有人累倒、病倒。只要生病不能上工干活，外地人就被监工拖走扔进狗圈，被活活啃咬撕碎吃掉，或者被在机场周围挖的一条条深沟里活活埋掉。还有的用车拉到江边，扔进松花江。而当地人病倒就被家人抬走，另换它人。几个月后这批人就会被打死、累死、病死一多半。然后日本人再用汽车从外地拉来一批补充。凡事从外地拉来的民工，无一生还，全部死在这里。方正县城西日军机场，是用一条条中国人的生命和血肉堆积而成的。

1945年8月20日苏联红军使用飞机将方正城西日军机场的地面设施，如：停机坪、飞机、塔台、炮台、机件库、油料库、储备库、机库、等全部摧毁，只剩下两个油料库和部分飞机跑道没有被彻底炸掉，整个机场成为一片废墟。

家住赵家屯79岁的王金发老人介绍：从他记事起，这里就是一片看不到边的草木丛生的荒野甸子，除了一些家住附近的孩子，经常来这里爬到破飞机上玩和在破飞机跑道上玩耍，很少有人来这里。后来，周围的人开始拆飞机零件卖钱，捡水泥块、挖废弃飞机跑道残片回家，垒猪圈，铺院子，建围墙。再后来，有人在边上寻找空地刨小开荒种点庄稼和一些蔬菜。1959年周边生产大队和生产队发动社员群众大量清理水泥块、石头和杂物，大面积开荒种地，在机场东侧建房，成立了一个不足20户的小屯，后称赵家屯。1968年方正县林业科在机场东南部位建起了林场苗圃；同年县农业科在苗圃南侧建起了方正县良种场，在机场正南建起了方正县农场。1971年县教育科在机场东南苗圃和良种场中间，建立了方正县中学。

到 1971 年，整个城西日军机场已被周围生产大队和生产队基本开垦恢复为农田。飞机跑道和设施残骸大部分被清除，只有西侧中间部分被县武装部作为靶场使用。如今，靶场也已废弃，已开发成水田，被人承包耕种，土地使用权仍归县武装部所有。现在这片土地已变成了一片农田。一些残存的机场设施被村民围起来，养起了猪和牛羊。开垦方正城西日军机场和拥有土地使用权的有方正镇庆丰村、方正镇晴天村、县林业局苗圃、县农业局良种场、县农业局水稻研究院、松南乡向阳村、德善乡丰裕村、德善乡新城村、方正县三和园花苗基地等十几个单位。

如今，见证方正县城西日军机场存在的仅剩两个高出土地面 2.5 米，直径 6 米，周长 19 米，厚 0.5 米，水泥构造，（里面地下部分以填满黑土）的飞机油料库痕迹，还有两处被炸毁的飞机库残体和一个井口水泥构件。

2004 年 9 月 23 日，方正县人民政府在城西日军机场建设标识“日军机场遗址”。

私も日本国家から棄民された！

—中東のクウェートでイラクの人質になった私たち—

長谷川 捷一

1990年8月2日イラク軍はクウェート国に侵攻し、私たち夫婦を含め日本人約250名がイラクの人質になった。私はそれまでアラビア石油(株)のサウジアラビアのカフジ鉱業所に2回の赴任で計14年勤務した後、1988年に3回目の赴任でクウェートへ派遣されていた。カフジ鉱業所の操業とクウェート石油省との技術調整をする任務だった。何故クウェート石油省と関係があるかと言えば、アラビア石油が原油を生産していた石油鉱区はサウジアラビアとクウェートとの中立地帯であったため両国が半分ずつ権益を持つためだ。

イラクがクウェート侵攻した！

イラク軍のクウェート侵攻には事前に予想出来ないことはなかった。イラン・イラク戦争は、1980年9月から1988年8月まで8年間続いたが、これによってサダム・フセインはイランのホメイニが始めた宗教革命の輸出を防いだと自負していた。しかしクウェートをはじめアラブ諸国にその様な認識は無かった。

OPECは各産油国の生産枠を決めていたが、その当時クウェートはその生産枠を越えて増産をしていた。イラクは戦後復興のために資金が欲しかったのだが、クウェートが増産していたために油価が下がったと、これはどのような計算からなのか、サダム・フセインはクウェートに対して、増産分の140億ドルを弁償しろと請求書を叩きつけた。

更にイラン・イラク戦争の期間中イラクはイラク最大のルメイラ油田をイランの侵攻を防ぐために全部の油井を閉めていた。そのルメイラ油田はクウェートにもまたがっており、クウェートはイラン・イラク戦争中に15本の油井からどんどん原油を汲み上げていた。戦争が終わってイラク側が油層圧を測定すると非常に下がっていたので、サダム・フセインはクウェートがオイルを盗んだと言い、クウェートに対して24億ドルの請求書を叩きつけた。

小国クウェートの苦悩

クウェートはイラン、イラク、サウジアラビアという大国に囲まれた小さな国なので、安全保障という意味からも神経を使わなければならないはずだった。しかしイラクからの2回の請求書に対して少しでも考慮すべきところを、クウェートは非常に強気で何と逆にイラン・イラク戦争中にイラクへ融資した300億ドルを返却しろと言ったため、遂にサダム・フセインの堪忍袋の緒が切れ、クウェート侵攻が始まったと見るのが妥当のようだ。

あるいは一方、1914年にクウェート周辺がイギリスの自治保護領となるまでオスマン帝国領であったことをサダム・フセインは侵攻の大義名分としていたのかもしれない。因みにクウェートは1961年イギリスから独立し1963年にはアラブ連盟と国際連合に加盟した。

目が覚めた早朝の緊急電話

1990年8月2日午前6時、JAL駐在員からの“空港が閉鎖されました”の電話で目が覚めた。クウェート放送は「イラク軍が午前2時に国境侵犯、領内に進行中」と伝えた。マンションの窓から海沿いの道路を見下ろすとキャッツアイ（センターラインを示すランプ）をブチブチ壊しながら走る戦車の列。アラビア石油クウェート事務所長から電話がかかった時、ちょうどドンパチの音が聞こえたらしく、びっくりして「すぐに我が家に避難した方が安全でしょう」と言ってくれた。所長邸は内陸なので確かに私たちの海岸沿いのマンションよりも安全と思われ、すきをみて移動することにした。

そこへ今度は日本大使館から電話があり「状況がひどければ避難して下さい。但しあくまで本人の判断で」と役人氣質そのままの責任を取らない言い方、まあそこまでは許されるとして、「ところでお宅はどこですか？」にはあきれたものだ。アメリカ大使館はクウェート在住のすべてのアメリカ人の住所・連絡方法を把握していたのだ。

後日分かったことだがクウェート侵攻開始前にイラク軍がクウェート国境に続々集結していたことは分かっていたという。このことを分かっていたM商社は全員国外に逃れていたというのではないか。ましてや日本大使館であれば把握していたに違いないが、その情報は一切伝えてもらえなかった。

頼りにならない日本大使館

8月7日、日本大使館より外務省本省の訓令に基づき邦人は全て寝具携行の上、日本大使館へ集合せよと緊急連絡があった。当時クウェートには家族を含め約400人が駐在していたが、ちょうど夏休み時期で250人に減っていた。その250人が日本大使館の地下室で雑魚寝することになった。そこはさすが日本人で、14班に分け炊事、食材調達、補修、清掃、情報収集等の担当を決め、自主的運営による地下室の生活が始まった。

しかし仕切りは一切なく、いびきあり、赤ん坊の泣き声あり、うなされる声あり、雄叫びありで寝られたものではなかった。イラク放送でクウェートはイラクの一部、“イラク共和国”宣言をし、サダム・フセイン大統領は盛んに「クウェートは歴史的にイラクの一部だ」と主張していた。

アラビア石油のクウェート事務所勤務者は5人、それにリヤド事務所勤務の者がクウェートに立寄っていたので、計6人いたが、私たちアラビア石油の者だけは外出を認められていた。それはアラビア石油がクウェートでは一番古く、日本大使館よりも人脈があるということで情報集めに利用されていたという訳だ。日本大使館の黒川剛大使は休暇で国外に出ていたので城田安紀夫参事官ら館員は11名いたが、外務省プロパーは恐らく4、5人のみで、あとは商社や銀行、大阪府警といったところからの派遣員で構成されていた。従って確かに情報は満身に収集されないに違いなかった。ある日フィリピンの50人が国境を通過しサウジアラビアへ逃れたことを日本大使館に伝えると、「えっ、そんなことがあったんですか」と言う。フィリピン大使館は日本大使館の目と鼻の間なのだ。

もし日本から救援機が来た時に日本大使館からクウェート空港へ如何に移動するかについても練習した。自家用車に番号を振り、誰がどの車に乗るかも決めて訓練をした。空港は閉鎖されているのでタラップはもちろん使えないので、日本航空の社員によれば機体の

真下に直径 60 cmの開閉部があるそうで、各自荷物は 1 個、直径 60 cmの穴を通過する大きさと決められていた。しかし、日本は国として救援機を保持しておらず、JAL は組合の反対が強く遂に救援機は飛来することはなかった。

迷走する日本の外務大臣

8 月 22 日の BBC によれば中山太郎外相はアンマンにおいて「もしヨルダンがイラク経済制裁により損失が出れば日本はそれを補填する」と言明した。全くタイミング悪く余計なことを言うものだ。8 月 24 日にイラクはクウェートの各国全大使館の機能を失わせると宣言したため、外務省本省はバグダッドの日本大使館の管轄下の方が安全と判断したのか、バグダッドへ移動する様勧告が出た。私たちアラビア石油社員は残留を決めていたが、23 日になって城田安紀夫代理大使より個人の家においてもイラクに拉致されるだけなのでバグダッドへ行ってくれと強いられた。

いち早く解放されたフランス人の人質

8 月 23 日 200 人を超す日本人は各自 35 クウェートディナール（約 18,000 円）のチケットを購入し 4 機に分乗してバグダッドへ向った。日本はイラクに対しそれまで 9,000 億円の経済支援をしており、対日感情もとても良かったはずなので、バグダッドに着いたら解放されると信じていた。しかしそれは覆され、全員マンスールメリアホテルに監禁された。中山太郎外相はヨルダンの帰路ストックホルムで記者会見し「憲法を改正してでも自衛隊の派遣を検討したい」とまたもやタイミング悪く、可能性もない発言をした。どんどん日本人への締め付けが厳しくなっていく。日本人は 15 班に班別され、それぞれ水力発電のダムの上、発電所のタービン脇、空港のサテライト、あるいは私たち夫婦の様にベイジ製油所等、それぞれ戦略拠点に“人の盾”としてイラク国中に分散された。

8 月 26 日夜、婦女子の出国許可が出たという朗報が入った。これは英国のマーガレット・サッチャー首相がサダム・フセインへ「何という非人道的なことをするのか！」と強烈な表現で糾弾したことによった。8 月 29 日家内（妻・悠紀子）たちは帰国の途に着き、家内だけでも助かるので私としては安堵した。

家内たちはバグダッドに着きすぐ救援機に乗れると思いきや、バグダッドで 1 泊しなければならなかったそうだ。それは飛行機の費用をどこが負担するかが決まらなかったからというのではないか。この非常時に何を考えているのかと憤りを感じた。

家内たちは帰国の機内で「どうにかして人間の盾としてイラクに残された夫たちを救出しよう」と話し合ったという。その留守家族の連絡会の名前は「あやめ会」と決まり、家内がそのまとめ役となった。

家内たちが帰国した後の私たちの人質仲間は英国人 5 名、米国人 2 名、ドイツ人 4 名、フランス人 4 名、日本人 3 名の 18 名になった。9 月 23 日私たちは更に北部のキルクーク油田地帯の製油所に移された。

クウェートからの撤退とパレスチナ問題の解決をリンクさせた国際会議を提案したフランスのミッテラン大統領の構想をイラクが評価し、フランスの人質は一番早く全員解放になった。

能天気な日本の政治家とメディア

BBC や Voice of America は毎時間に人質に向け激励の放送があり、「あなたたちが一人残らず解放されるまで私たちは頑張ります」と人質たちを励ますではないか。それに反シラジオジャパンは1日に2回のみ、その内容は「相撲の結果や秋の味覚」、この日本と英米の差の大きさに、「なんで私は日本人に生まれたのか」と情けなく涙が止まらなかった。ラジオジャパンは時々人質へのメッセージもあったが、「人質解放の進展なし、外務省よりイラク北部は肝炎、赤痢、食辺りが多いので生水、生野菜、エアコンを避けなさい」と伝えた。それでは何を飲めと言うのか、野菜は生しか無く、この暑さをエアコンなしでどう耐えろというのだろう。全く我々の置かれた状況が何も分かっていないのに腹が立つばかりだった。

ドイツの Deutsche Welle も毎時ではなかったが、人質を励ます内容ばかりで羨ましかった。ラジオジャパンには私が解放された後に文句を言いに行ったのだが、「世界に出ている人はあなたたち人質だけではないので」と言われ、あっけにとられた。

日本は私たち人質をどう扱おうとしているのか？ラジオジャパンは「イラク第一副首相のラマダンが北京のあと、東京に立寄りを希望するも日本はこれを拒否した」という。先方から日本へ赴くというのに何故話し合いの好機を絶つのか、全く理解に苦しんだ。家内が留守家族の会・あやめ会のまとめ役をしていたのだが、時の海部俊樹首相は家内に「ラマダンはイラクで何番目に偉いのですか？」と尋ねた由、あきれられるばかりだ。

10月4日、中東歴訪中の海部俊樹首相はヨルダンのアンマンでラマダン第一副首相と会談を実現させたが、「外国人の拘束は認めない、武力による他国への侵略は容認できない」と主張するのみで人質解放の交渉もなく成果は上げられなかった。

アメリカは米国イラク協会会長を団長とする代表団を派遣したり、英国もヒース元首相がバグダッドを訪れるなど外国は第一に人命を考え、表向きの強硬策とは別に、一方ではひそかに交渉を行って自国民を救出するしたたかさでもって次々と解放に結び付けていった。イラクも経済封鎖により徐々に苦しくなり、イラクは人質解放を取引材料として水面下で検討を始め、ついにイラクでは名前の知れた中曽根康弘元首相のミッション（約30名）がイラクのクウェート侵攻後、3ヶ月にしてやっと11月初めに特別機でやってきた。

サダム・フセインと如何なる話し合いがされたのかは定かではないが、イラク駐在の日本人を含め約240人中74人の日本人が11月8日羽田に戻る事が出来た。赤じゅうたんが敷かれた機体前のタラップから降りてきたのは中曽根ミッションで、カメラマンたちはあわてて人質たちが降りてきた機体後ろの暗いタラップへ走ったというエピソードまであった。解放された74名は年寄りと健康に問題のある者が選ばれたということが、後に分かった。すなわち私は52歳なのに老人の扱いだった訳だ。

帰国して2、3日後、外務省より招集がかかり、労いの言葉でももらえるのかと赴くと、ご苦労様でも、お疲れ様でもなく、現地での情報が欲しいだけが目的の招集でがっかりして帰宅した覚えがある。

アントニオ猪木ら人質全員解放に貢献

議員会館へ日参していた家内たちあやめ会の活動に応じてくれる議員が出てきた。戦争

中の“満州”で「李香欄」として一世を風靡した山口淑子議員だった。しかしアメリカの方針に追随することを基本とする外務省は彼女のイラク行きを拒絶した。

ところが日本という国とは無関係にアントニオ猪木議員は2度も直接イラクに乗り込み、プロレス興行に音楽を加えた「平和の祭典」を提案した。サダム・フセインの息子・ウダイと親しかった伊藤忠のバグダッド事務所長・野崎和夫氏の支援も得て、遂にバグダッドで「平和の祭典」が実現することとなった。そのことを聞きつけた家内たちあやめ会の有志はアントニオ猪木議員と共に11月30日にバグダッドへ向うこととなった。それまでには外務省は各企業に「夫人たちをイラクへ行かせないように、何があっても責任は取れない」旨のファクスを送っていた。

この時も親日家のトルコのオザル大統領の計らいでトルコ航空機がわざわざ日本に迎えに来てくれアンマンまで連れて行ってくれた。アンマンからはイラク航空でバグダッド入りしたのだった。「平和の祭典」は11月2日と3日に行われたが、夫人たちが宿泊していたマンスールメリアホテルに、戦略拠点に分散されていた人質たちが11月3日続々と集められ家族との感激の対面が実現したのだった。

当初は迎えに行った夫人の夫だけが解放されると発表されたのだが、野崎氏、猪木氏、そして「平和の祭典」の音楽の部で活躍したアメリカ人歌手・クリスティーヌの3人がウダイへの渾身を込めた“全員の解放”を懇願し続け、遂にウダイをして「ではサダム・フセインへ手紙を書いてくれ」と言わしめた。

その結果、遂にサダム・フセインが国民議会に要請し、圧倒的多数で「外国人全員の出国を許可する」決定を下したのだった。

「全員解放」となるや、日本政府は突然特別機を派遣することを決定した。ヨルダンのアンマンまではイラク機で全員が移動したが、そこで奇妙なことが起こった。日本政府は猪木議員の行動を面白く思っていなかったのも、外務省は特別機には「人質とその夫人」以外は乗せないと通告してきた。あやめ会会長の長谷川悠紀子は憤慨し、「私たちイラクまで迎えに来た夫人たちも特別機に乗りません」と宣言した。これが波紋を広げ、人質たち男性も全員同調し、「猪木さんを男にしようじゃないか」と言いだした。あわてたのは外務省、各国が表向きの強硬策とは別に巧みに外交戦を裏で展開していたのに反し、日本の無策に怒りが向いていたことに初めて気づいたのか、特別機をカラ（空）で帰国させるわけにいかず、遂に「猪木さんにも乗っていただきます」となり、全員が同機で11月7日に帰国できたのだった。

海部首相が「教科書にない事件で、手の打ちようがなかった」と述べたのには驚きというよりもあきれた。ビジョンと憲法が欠落した人が首相を務めていたのだと思うと情けなくなる。外務省の栗山尚一外務事務次官にいたっては米国への従属を選び、人質の犠牲を何とも思わず「解放されたのはラッキーだった」とテレビで語った時には一発パンチを食らわせた衝動にかられた。

日本は今まで国際貢献やビジネスの最前線で頑張る企業戦士が危機に陥った場合、その救出を長い間他国に委ねてきたが、この状況は今尚続いており先進国の一国として実に恥ずかしい限りだ。



長谷川夫妻は日本が建設したヒマラヤ小学校の子どもたちをボランティアで支援している。
ヒマラヤ小学校で。(左) 夫人の悠紀子さん、(右) 長谷川捷一氏と子どもたち



釈放が決定して凱歌を挙げる猪木議員と夫人たち

(はせがわ・しょういち：1938年東京生まれ。1961年より1998年まで石油エンジニアとしてアラビア石油㈱に勤務。通算18年中東に駐在。技術士(金属部門)。現在、文京区民オーケストラでフルート演奏、他にスキー、テニス、ヨガ、トレッキングを楽しむ)

「文化大革命」をどうとらえたらいいのか？

—文革時期、新聞記者として北京に滞在していた私—

秋岡 家榮

中国で文化大革命という時期がありました。その文革初期には、何人かの北京駐在員、特派員が国外追放になりました。それは1967年11月、私が北京に着任する前のことでした。

私が新聞記者として北京に滞在中、国外追放になった特派員はいません。当時、国交のない記者の滞在期間は1年、それも半年ごとに滞在許可を更新しました。滞在許可の1年期限が切れると、国外に出て、改めて入国許可を申請するのです。

周恩来総理との会話

私の記憶では、共同通信とNHKの特派員は、在留期限が切れて出国した後、なかなか再入国許可が出なかったことがありました。両社とも、アジア通信連盟、アジア放送連盟に参加していたのですが、そこには台湾が加盟していることの政治姿勢を問われたからだと思います。両社とも、連盟を再整理された後、再入国の許可が出ています。

日本経済新聞の鮫島特派員の拘束があり、後任の入国がおくれましたが、しばらくして入国が認められています。

1970年、成田知己委員長を団長とする日本社会党代表団が北京を訪問、中日友好協会と政治会談のあと、共同声明を出したのですが、その調印式に周恩来総理が出席し、私に「あなたはどこの記者？」「ああ、朝日新聞。歴史と伝統のある、立派な新聞です」「あなたは中国の事情に通じましたか」「あなたはなん歳？」「若い。あなたの前途は光明に満ちています」と言った会話がありました。

代表団は団会議で「周総理はなぜ、あんなに親しく秋岡さんに話しかけたのか」ということを議論しましたが、結論はなし。私は「準政府間貿易である覚書貿易と記者交換のかぼそい糸は切らせない」という周総理の決意表明であったと思います。その2年後に国交は回復しました。

「歴史の証言者になれ」

当時、北京にいた日本人記者は私一人でした。他の同僚は再入国の許可待ちで、国外に出ていたのです。それを追放と誤解した地方新聞の社長が新聞協会大会の席上、日中記者交換の断絶、総引揚げを主張したのです。それに応じていたら、日中国交回復はずいぶん遅れたと思います。

当時、朝日新聞社長の広岡知男は「書けないことがあれば、書かなくていい。北京に残留すれば、のちに歴史の証言者になりうる。それが貴重なのだ」と記者交換廃止論を退けました。

私は2017年11月4日、北京で開かれた「日中関係討論会」に基調報告を提出し、歴史的証言を行いました。この討論会は、中国側は外交部外郭の中国国際友人研究会、日本側は日中友好99人委員会です。

文化革命をどう評価するか

中国作家協会主席の文豪、巴金先生が来日されたとき、創価学会の主催した講演会で「私は文革当初、＜魂に触れる革命＞と思ったが、そのうち、権力闘争に見えてきた」と文化革命を批判しました。

毛沢東主席の没後、文革推進の4人組が逮捕された時から、文革の被害を受けた人々が口を開き、文革のむごさを訴え出しました。文革はいま、大きな災害であったと受け取られています。

しかし文革を発動した毛沢東の故郷や、毛沢東率いる部隊が1927年、中国最初の農村革命根拠地を築いた井岡山は革命聖地として、多くの国内観光客を集めています。毛沢東主席に誤りはあったにしても、「建国の父」であることには、変わりはないのです。

鄧小平は「富国の父」です。改革開放を唱え、中国を経済的に豊かにしました。今の中国は軍備を強化して「強国」を目指す時代に入っています。こうした変化の流れの中で、文革をどうとらえたらいいのでしょうか。

中国人の歴史家は、相争った人々が死に絶えた後になって、初めてその時代の歴史研究が始まる、という姿勢を尊重しています。文革前の日本の中国研究家の間では、「中国の歴史家のなかでは今ようやく、清朝末期の太平天国の研究が始まった」と言われたものでした。

歴史研究とは何なのか

東京大学に福岡愛子という文革研究家がいる、私は彼女の求めに応じて何回か、日本記者クラブで、その質問に答えました。わたしの答えはただひとつ「急ぎなさんな。歴史研究はすべからず、今、この世に生存する人びとがすべて亡くなってから」と主張しました。

時の政府が文革を総括するのは当然です。しかし、歴史研究となると、「なぜそんなに急ぐの？」という疑問がわきます。福岡さんは『日本人の文革認識』という大部の著作を刊行されました。版元は「新曜社」です。ご恵贈いただいているので、そのうち拝読させていただきます。

私の文革認識は以下のようなものです。

1956年ごろ、中国社会主義の制度改革がほぼ終わり、資本家、地主制度は消滅しました。問題はその後です。毛沢東主席は「資本家、地主は制度としてはなくなったが、資本家の考え、地主の考えまで消滅したわけではない。それを消滅するには革命の継続しかない」。

国家主席の劉少奇や党書記局を支配した鄧小平は「地主、資本家がいなくなったからには、疲弊した国土を復旧し、生産を伸ばして、国民の生活を豊かににすることが先決」と考えたのです。これが文革まで続いた両派の争いでした。しかし、文革推進派は大衆を動員して、相手を消滅する闘いに転じました。文革批判の時期を経て、今の中国は社会主義に市場経済を導入し、資本家を生み、貧富の差を広げています。

文革は中国発展史の一コマ

中国共産党には党中央の経営する党学校があります。そこの教授に尋ねました。「中国の社会主義はどういう道程をたどって、共産主義にゆきつくのですか」「それは言えませんが、どこの国も経験したことのない、前人未踏の道ですからね。自信をもって、〈これぞ共産主義への道〉と言い切るほどの自信はない。しかし、我々は懸命にその道を探っている。怠惰に眠っているわけではない」。

社会主義の総路線を説明する理論は未発表です。今は国民生活をどれだけ豊かにするか。昨日より今日が豊かでなければ、共産党は国民の信を失うでしょう。中国国民経済がアメリカを追い抜くのはもう目前。しかしその先、インドが中国を追いかけ、東南アジアは日本を追い抜こうとしています。文革は中国発展史のなかの一コマ、今はまだ資料を集める段階なのです。

(あきおか・いえしげ：1925年生まれ。元朝日新聞北京支局長、朝日中国文化学院創設者兼初代院長。日中友好99人委員会創設者兼総代表。中国の文化大革命期に中国政府から国外退去を命じられずに中国に残った9人の外国人記者のうち、ただ一人の日本人記者)

自然エネルギーという言葉に騙されないで！

—山田征著『ご存知ですか、自然エネルギーのホントのこと』を読んで—

江藤 昌美

風化しつつある原発の恐ろしさ

チェリノブイリの事故、そして 2011 年 3 月 11 日の福島の重大事故で、原発の恐ろしさは世界を震撼させました。しかしいつの間にか人々から、地震・津波・原発大事故の恐ろしさが忘れ去られたような気がします。もちろん反原発の声を挙げる人々の活動は続いています。国を動かすような運動には未だ至っていません。そして、「何とか原発を止めたい」と活動していた人たちは、「脱原発自然エネルギーへの転換」への運動に変わっていききました。

ところで風車は風では動かない原発と同じで、外部の電源がないと始動したり風の向きに合わせて羽の向きを変えたり止めたりすることなどの操作ができないのです。

自然エネルギーもバックアップ電源として電気が必要なのだ！

また風車には、放射性物質を生むレア・アースがトン単位で使われています。建設の工事は、下から山頂までの 5 メートル幅の道路建設から資材置き場など酸素の供給源であり二酸化炭素の吸収源だった森や林が丸裸にされていくのです。

太陽光(ソーラーパネル)は、日本全国どの地域でも面の広さで大地がはがされ裸にされ、大中小さまざまな数のソーラパネル設置が進んでいますが、パネルの中身は、鉛、カドミウム、ヒ素、セレン、水銀、六価クロム、ベリリウム、アンチモン、テルル、銅、亜鉛、すず、モリブデン、インジウム、ガリウム、銀などが含まれているのです。

設置して 20 年前後で廃棄処分になってしまう多くの有害物質も原発と同じであると言えます。

太陽光発電をしている家庭や事業所で使い残した電気を通常より高値で買い取りその買取にかかった費用は、「再生可能エネルギー促進賦課金」として、全ての電気利用者から電気料金の一部として徴収されているのです。この現実を知った山田征^{せい}さんは、促進賦課金を払わない事に決めました。そして電気を切られた今、ろうそくと懐中電気で生活しています。

山田征さんは 1938 年生まれ、長年反原発運動に関わり、現在は地球規模で設置拡大され続けている風力や太陽光による発電設備の持つ深刻な諸問題について講演活動を続け、昨年 12 月、『ご存知ですか、自然エネルギーのホントのこと』を出版されました。ぜひ多くの人々に読んでほしい一冊です。最後に山田征さんからのメッセージをお伝えします。

「この自然界は、地球という星は、私たち人間だけのものではない」

本書に関心ある方は、東京都三鷹市井口 2-18-13 ヤドカリハウス 山田征まで、ご連絡してください。

(えとう・まさみ：1941 年生まれ。現在、横浜市在住。3・11 事件以降、地元横浜を中心に脱原発運動に関わる他、介護事業や市民活動に携わる)

対立・侵略・追放・和解

～ドイツ・ポーランド関係史から考える東アジアの隣国関係～（上）

木村護郎 クリストフ

1. はじめに

今日は、ヨーロッパの事例から東アジアを考えるという話をさせていただきます。あえて離れたところを参照することによって、日本および東アジアを考えるうえでも、得るところがあればと願っています。

今日の話の目的は、三つあります。一つは日本の海外居留民、特に満蒙開拓団の経験と本当によく似ている東方ドイツ人の戦争体験（敗戦体験）に注目するということです。ここで東方ドイツ人というのは、ポーランドなど現在のドイツより東の地域に住んでいたドイツ系の住民を指します。

それをふまえて、第二に、ドイツおよびポーランドという国、またドイツ人とポーランド人が戦後、隣の国（民）との関係をどのように修復しようとしてきたのかということを見てみたいと思います。

最後に、それをとおして、東アジアの中にある日本の現在、過去、未来と向き合う上で、何か示唆することがあるかを考えてみたいと思います。

ドイツについては、歴史と向き合う姿勢が素晴らしい、日本もドイツから学ぶべきだという声が聞かれる半面、ドイツと日本は事情が違うのにドイツを持ちだすことについて疑問をもつ意見もみられます。私としては、ただドイツの例をまねるのではなくドイツとの比較を単純に嫌がるのでもなく、似ている面と異なっている面をみすえて、日本のことを考えるきっかけにできれば有意義だと思っています。

はじめに、私のドイツの祖母の避難体験からお話しして、第二次世界大戦の敗戦期のドイツ人の「避難・追放」と日本人の「引揚げ」とどこが似ているのか、どう違っているのかをまず確認したいと思います。その上で、戦後どのようにドイツがポーランドと向き合ったか、ポーランドがドイツと向き合ったのかということ、里程碑となったいくつかの出来事を中心に見ていきましょう。またそういう大きな流れの中の一つの例として、ナチスの親衛隊員であった祖母の弟が戦後、ポーランド人との和解のためにどのように活動したかをご紹介します。最後に、日本についても考えたいと思いますので、ぜひ皆様のご意見、あるいはご経験についてお伺いできればと思います。

2. 敗戦と避難 ～祖母の体験から～

では、はじめに、祖母(1919年～2011年)の残した自伝をもとに、避難体験を紹介したいと思います。祖母は、第一次世界大戦のあとポーランドという国が復活してドイツ領からポーランド領になったラヴィチという町で生まれました。この町を含む地域は、17世紀以降、ドイツ人の職人などが多く移り住み、第一次世界大戦後にポーランド領になってから多くのドイツ人がドイツへ移住して去っていったものの、祖母が育った1920～30年代、ドイツ人の比率はなお10%強でした。ポーランド領になって以降、ポーランド語が国の公用語になり、公立の学校はポーランド語で授業をするようになったので、ドイツ人たちは自

分たちで学校を作って子どもを通わせました。祖母もそのようなドイツ系の学校に通っていました。しかしポーランド語も必要ということで、祖母は同じ町に住むポーランド人の家庭に一定期間、ホームステイをしていました。日本では、海外に語学留学をしたりしますが、それを同じ町の中で行うわけです。国内留学どころか市内留学です。これは中央ヨーロッパで以前から行われてきた多民族地域共存の一つの方策でした。今でも多言語国家のスイスなどでみられます。このように、市民レベルでは共存を図る動きもあったわけですが、国同士の関係はだんだん怪しくなっていきます。ポーランドは、ポーランド人の国をめざしてドイツ系住民などの国内の少数民族をポーランド人に同化する政策を進め、一方、ドイツでは1933年にヒトラーが政権を取り、ドイツは次第に領土拡大路線を打ち出します。

そのような時代の中で、祖母は、ダンチヒ出身の青年（私の祖父）と出会い、結婚します。現在、ポーランド北西部に位置するダンチヒ（現グダニスク）は当時、ドイツ系住民が多数派を占める町でしたが、ドイツとポーランドの間であって両国の折り合いがつかず、第一次世界大戦後、どちらの国にも属さない自由都市となった町です。1939年になると、ポーランド領内のドイツ人は身の危険があるとの父親の判断で、祖母はダンチヒの夫の実家に身を寄せることになりました。まさかよりによってダンチヒで第二次世界大戦の火ぶたが切って落とされるとは夢にも思わずに……。

祖母の自伝から、1939年の8月末のエピソードを一つご紹介したいと思います。祖父母は、夏の間、ダンチヒ郊外の農場で手伝いをしていました。その農場で豚を飼っていたのですが、あるとき、その豚が囲いから逃げてしまって外に脱走してしまった。豚の世話をしていた祖父母はあわてて追いかけるのですが、あたふたしているうちに、豚が国境を越えてポーランド領に入ってしまったのです。当時、ポーランドの国境警備兵とドイツ系のダンチヒの国境警備兵はもう一触即発の状況で向き合っていたようです。その間を豚が走りまわります。そのとき、双方の警備兵が一緒に協力して豚をつかまえてまた囲いに戻したということです。国同士が緊張関係にあるなかでも、人々の間では協力ができたという一例といえるかもしれません。

この出来事からわずか数日後、1939年9月1日の早朝、ダンチヒの港に泊まっていたドイツの艦船がポーランド軍の基地に向かって砲撃を始めます。ドイツ側は、ポーランド側が攻撃を始めたから撃ち返したと主張したのですが、現在ではドイツ軍が攻撃を始めたということが明らかになっています。このダンチヒのヴェスタープラテという場所での砲撃事件が、第二次世界大戦の始まりになっています。

自伝から、その部分をお読みします。先ほどの豚の事件のすぐ次の段落です。

「間もなく戦争が始まりました。その始まりを私たちは自分たちの家の屋根の上から見ました。私たちは、それがどれほど深刻で危険なことであるかをほとんど認識していませんでした。なぜならば戦争などというものを知らないし、戦争について深く考えたこともなかったからです。その日の朝、私は早朝にドーンというものすごい大きな音で目覚めました。雷が落ちた音よりもずっと大きい、これまで聞いたこともない音でした。驚いて部屋から飛び出ると、夫が、何が起こったか見ようと言ったので、一緒に屋根の上に上って、

ドイツの艦船が陸の方のポーランドの基地に向けて砲撃をしているのを見ていました。」

はからずも第二次世界大戦の開始を目撃したことになります。その後、市内でも攻撃が行われ、ダンチヒ市内にあるポーランドの管理する郵便局をドイツ側が攻撃しました。この時のポーランド人郵便局員の英雄的な抵抗が、その後のポーランド人のドイツ人侵略への抵抗の皮切りとなりました。この部分も自伝からお読みします。

「この郵便局の砲撃に際しても、私と夫はすぐにそばに立って、それほど遠くない所に立って見ていました。そして私たちはこの事件がその後、これほど大きな戦争の始まりになるとは夢にも思いませんでした」。

その後、ドイツ軍は破竹の勢いで進軍し、ヒトラーがダンチヒに入場します。祖母の自伝からさらに読みます。

「こうして、ドイツ軍が勝ってダンチヒに入場することになり、ヒトラーが来ることになりました。そしてヒトラーは、解放されると喜ぶ[ドイツ系の]市民の間を歓呼に応えながら車に乗ってダンチヒをパレードしました。私たちも道路沿いに立っていました。そして立っている私たち一人一人が、通り過ぎるヒトラーと目が合ったという感覚を持ちました。これが私のヒトラーとの出会いでした。」

ヒトラーを歓呼して迎えた群衆の中に祖父母も交じていたのです。当時のドイツ系の人々の感覚としては、自由都市という中途半端な状態を脱して、ようやく第一次世界大戦前のようにドイツ領に戻れるということで、心から歓迎するという心境であったと祖母は書いています。

しかし当時、他の地域ではドイツ軍の侵攻にポーランド軍が抵抗を続けていました。ドイツの侵略によって、ポーランド人は多大な犠牲を被るのですが、ドイツ軍への対抗のなかでドイツ系の一般市民も被害に遭いました。祖母の実家のあるラヴィチでは、ポーランド系の自警団のような集団がドイツ系住民を襲撃することも行われたようです。しかし、祖母の実家は無事でした。なぜでしょうか。庶民レベルの共存の一例として自伝に記されたエピソードをご紹介します。

祖母の父親は皮革の工場を経営していましたが、庭先に小屋があって、そこに年配のポーランド人を住まわせていました。その人は、ほうきを作って売って生活していましたが、暖かい季節はその小屋ですごして、冬になって寒くなると、ちょうど冬の間は刑務所に入るくらいの罪を犯して、春先に温かくなるころに出てくる生活だった、と祖母は書いています。そのあたりの細部は詳細不明ですが、戦争がはじまった 9 月、その人が、しばらく家に住ませてもらえたらきっとお役に立ちますよ、と言ったそうです。そして、ポーランド人の集団がドイツ人を襲撃にやってくると、その人は、ここは自分の家だと言って追いついて、祖母の実家は被害を免れたとのことでした。

しばらくするとドイツ軍がこの地域までやってきて、ラヴィチはドイツの支配下におか

れます。その後、戦時中とはいえ、この地域では戦闘は行われぬまま、祖母は親元で暮らします。祖父は兵隊として召集されていき、時折休養に戻るのみでした。やがて次第にドイツ軍の敗色が濃くなり、敗戦の年 1945 年を迎えます。1 月半ば、ソ連軍がドイツに占領されたポーランド西部への大規模な進撃を開始します。そのときの部分を読みます。

「1945 年の 1 月、私の人生で一番辛い時期が始まりました。1945 年 1 月 19 日、突然、知らせがきて、ロシア軍がラヴィチに向かって進軍しているので母親と子どもは町からすぐ出なければならない、1 時間後に最後の列車が出発するというのです。ちょうど幼い娘をお風呂に入れているところでしたけれども、大騒ぎになり、私たちは大慌てで荷物をまとめて駅に向かいました。町を立ち去っていいと言われたのは女性と子どもだけで、男たちは最後まで町に残って戦うということになりました。(…) 母は残ると言ったのですが、父が、いや、一緒に行かなければならない、と言ったことを私は忘れることができません。そして父は一人で駅のホームに立って見送ったのですが、孫娘が冷えるといけないからといって、自分のコートを手放さず渡してくれました。すごく寒かったにもかかわらず列車に暖房はなかったのです。父はコートのないまま、寒さの中に立っていました。この光景は私の心に焼き付けられ、今でも胸を締め付けられる思いです。父は、自分はもう助からないと知っていたかのようでした。実際、それが父を見た最後になりました。(…) 列車に乗る時に、あまりにも人でいっぱいだったので、せっかくかき集めた最低限必要な物をいれたトランクを持っていくことができず、結局手ぶらで窓から電車につめ込まれました。でも、あまりにもたくさん服を着ていたもので、全然痛く感じませんでした。」

その後、列車は無事ベルリンに着き、祖母は母と娘と共に 3 人で南ドイツの親戚のところに向かいました。以上が祖母の避難体験です。

2. 満蒙開拓をめぐる東方ドイツ人との共通点と違い ～背景から経験まで～

次に、以上のような局所的な小さな個人の体験を大きな歴史の流れで見るとどうなるか、日本の満蒙開拓をめぐる事情との比較をとおして見てみたいと思います。まず日本の場合は、国内の経済的困難や貧困への対応を一つの背景として海外進出をしていきました。その一つの標語が「満蒙は日本の生命線」というものでした。朝鮮半島を併合した後で満州国を作って、勢力の拡大をはかったわけです。

一方、ドイツも第一次世界大戦後、多大な賠償金を取られたうえ、世界恐慌のあおりを受けました。そのような中、強いドイツを取り戻すというヒトラーはオーストリアを併合します。さらに東方への進出をはかる際に出されたのが“Lebensraum Ost”（東方生存圏）という標語です。標語の趣旨も日本と似ていますが、国内の困難に対して、勢力拡大で対処するという同じような発想で、日本は西に、ドイツは東に進出していたということになります。

そして 1937 年に起こった盧溝橋事件が、日中戦争のきっかけになります。この事件は当時、日本の勢力圏であった満州国の外で起こった、つまり、日本のさらなる勢力拡大の動きの中で起こったと考えられます。先ほど祖母の体験で見たように、ドイツの場合も、ド

イツ領から外れたダンチヒで攻撃が始まって第二次世界大戦が起こっています。つまり盧溝橋事件とダンチヒのヴェスタープラテ砲撃事件は、どちらも日本とドイツの勢力圏から外れた所から起こって、勢力拡大をめぐる局所的な戦いが拡大して大きな戦争につながっていったというところも似ています。

徐々に満蒙開拓団の話に近づいてきますけれども、そのような拡大路線の一環として日本で行われたのが、「開け満蒙、行け満州へ」という満蒙開拓移民の募集でした。一方、ドイツでは、“Heim ins Reich”（帝国に帰ろう）という標語のもと、ポーランドを占領して併合した地域に、それ以外の地域からドイツ人を移住させることによって、この地域のドイツ人の比率を高めてドイツ人の土地にしようという計画を立てて、実行に移します。ですから、日本で満蒙開拓団を募集している時期に、ドイツでは、ナチスの第三帝国に新しく含まれた領土に移住する人々を募集していたということになります。その際、現地人の土地を取り上げて、ドイツ人や日本人はそれぞれ支配民族として生活することになりました。そのような移住計画を、ドイツは 1944 年まで、日本に至っては 1945 年まで続けて、最後の最後まで「新天地」への入植を続けました。

そして敗戦に伴う避難・引き揚げとなります。日本の場合、外地からの引き揚げ・復員は 600 万人以上で、当時の日本人の約 1 割にも相当する数です。そのうち約半数の 300 万人が民間人の引き揚げ者、そしてそのうち 100 万人以上が満州・中国東北部からの引き揚げ者とされています。一方、東方ドイツ人は、祖母の例のような避難から戦後の強制的かつ組織的な追放まで、あわせて 1200 万人以上が住みかを追われました。そのうち約 200 万人が途中で亡くなっています。現在のドイツの人口の約 5 人に 1 人は、この避難民の家系と言われています。

当時の日本人の引き揚げの様子とドイツ人の避難の様子を写真で見ると、（顔立ちの違いを別にすれば）どちらがどちらかわからなくなるほどよく似ています。先だって、「命がけで長い道のり」というタイトルで満洲からの引き揚げを扱った記事がありました（中日新聞 2017 年 8 月 6 日朝刊）、このタイトルはそのままドイツ人の避難にもあてはまります。同じ時期に大陸の東と西で同じような過酷な人口移動が行われていたのです。

以上のように、①国内の困難への対応としての対外拡大、②勢力圏拡大をめぐる紛争から戦争への経緯、③「新天地」への入植、④戦争末期から戦後の避難など、さまざまなレベルの共通点が浮かび上がってきて、ほとんど同じ時期に同じような現象がドイツの東と日本の西で起きていることが確認できます。つまり移住の背景から避難の経験まで、総じて見た場合に、非常に似ているのです。もちろん一人一人経験は異なるのですが、経験の種類として似ているだけでなく、細部まで酷似する体験を読むと本当に驚かされます。満洲からの引き揚げ者の体験記で、先ほどご紹介した祖母の体験ときわめて似たような、迫るソ連軍を前に短時間で荷物をまとめて引き揚げ列車に載って避難した方の話を読んだことがあります。ほかにも、避難中に襲撃を受けたり、一旦家に戻って改めて避難したり、逃げるなど住民に言っていた軍隊が先に逃げて一般人が取り残されたことなど、似ている点が多くみられます。引き揚げた後の日本、ドイツでの生活の困難も似ています。

一方、細かい違いが多数あることは言うまでもありませんが、いくつか大きな違いがあることは見逃すことができません。

まず満蒙開拓を含む大陸進出は、もっぱら 20 世紀になって、国策として行われたものであったのに対して、東方ドイツ人の入植には、中世以降数百年という長い歴史がありました。ポーランドの王侯などから要請されて移住したこともありましたが、1871 年にドイツ帝国が成立してから移り住んだ人々もいました。ナチスの占領下で移住した人はそのさまざまな流れの最後の一つの流れにすぎません。大多数の東方ドイツ人たちは、国策に伴う移民ではなかったのに、みなひっくるめて追放されてしまいました。

二つ目のちがいは、「満州国」の場合は「五族協和」という大義名分があったことです。あくまでも大義名分で、実態がそれとかけ離れていたことも事実ですが、満州の場合は少なくとも理念としては、諸民族が一緒に住もうという建前をもっていました。それに対して、ドイツの場合は露骨に「ポーランド人住民はドイツ帝国領内から追い出す」、「その他の占領地域では下等人間として奴隷にする」と公言していました。ポーランド人やユダヤ人などを排除してドイツ人だけの国にすることをうたっていたのです。

第三に、今日、中国東北部に行くと、七三一部隊や平頂山事件など、日本軍の残虐行為に関する大きな記念館がありますけれども、これらは実態としては軍の組織的な行為であっても、政府の政策として明確にうちだされて行われたものではありませんでした。一方、ドイツの場合は国の政策としてユダヤ人などを迫害したほか、かなり大々的に侵攻当初からポーランド人強制労働につかせ、またポーランドの知識人を収容して殺害しています。平頂山事件に類似するような虐殺もヨーロッパ戦線ではいくつも行われています。

ここでは、細部を省いてあえて単純化して、違いを際立たせる言い方をしていますが、要するに、ドイツの方がドイツ系住民の被害性も、国の加害性も、日本の場合よりはるかに明確なのです。被害性については、数百年ずっと住んでいたドイツ系の人々がまるごと追い出されたわけですから、強烈な被害者意識を持ちます。加害性については、ドイツはあまりにもあからさまに悪行の限りを尽くしたので、それが明るみに出につれて、開き直ったり弁解する余地はほとんどなくなりました。日本で「満洲国」についてしばしば聞かれるように「本当は良いことをするつもりだったし良い面もあった」というような言い分はナチス・ドイツの東方進出ではまったく通用しません。被害も加害もより明確であるということが、ドイツが戦後はっきりした態度を取った、あるいは取らなければならなくなった一つの背景にあるのではないかと思います。より大きな文脈では、戦前戦後の日独をとりまく国際情勢の違いなど、日独比較の論点はまだまだありますが、ここでは割愛します。

後半は、こういうことを経験したドイツとポーランドが、相互にわだかまりを抱えつつ、戦後どのように和解を模索してきたのかを見ていきたいと思います。

《注：本稿は 2018 年 3 月 17 日（土）、満蒙開拓平和記念館冬季講座での講演の採録である（一部省略）。次号に後半を掲載する》

（きむら・ごろうクリストフ：1974 年生まれ。上智大学外国語学部ドイツ語学科教授。エスペランティスト。著書『節英のすすめ—脱英語依存こそ国際化・グローバル化のカギ！』など。近年はドイツとポーランドの「民際交流」の歴史と現在を調査、研究活動を行う）

沖縄を侵略したのは大和（薩摩藩）とアメリカだ！

～進貢使の足跡を辿る 3泊4日の旅をして思う～

友寄 貞丸

冊封体制と琉球

3月中旬、中国へ派遣された進貢使の足跡を辿る 3泊4日の旅（総勢 31人）に同行した。中国と琉球の交流は「冊封関係」が始まる 14世紀にさかのぼる。中国の君主が冊封を媒介として近隣諸国、諸民族の長と取り交わす名目的な君臣関係を伴う外交関係（手段）で、琉球はその対象国にあった。

冊封のため中国から派遣される使者のことを「冊封使」という。到着後の最初の儀式は、崇元寺で王の霊を慰める「論祭」の儀式だ。新国王を任命するに際し、王朝が正しく継承されているかを確認する意味合いがある。後日、首里城正殿の御庭で、新国王の戴冠式を挙行し、これによって正式に冊封体制が築かれた。

琉球の中山王察度は 1372年、明の求めに応じて弟の泰期を遣わし貢物を納め、二代目の武寧は初めて冊封を受けた。その後、南山、北山がこれに続き、それぞれの呼称も明から付与された。1429年に尚巴志が三山を統一し、琉球王国が成立した。冊封の儀式は、14世紀から 19世紀末までの 500年間に 23回行われたと記録がある。福州で建造した船 2隻で約 10日かけて渡航した。

一方、琉球から中国へ派遣される使節を「進貢使」と呼ぶ。進貢使は中国皇帝に忠誠を誓う文書と貢物を携え、ほぼ 2年に 1度、総勢 300人 2隻の船で渡航した。福州に入港した進貢使は、約 3千キロを約 50日かけて陸路北京に向かった。北京では領事館に相当する施設に滞在し、皇帝との面会に臨んだ。皇帝から琉球国王への文書・貢物を賜り、滞在費用はすべて中国が負担した。

現存する足跡

今回の旅は、琉球王国の出先機関で、使節の宿泊所、交易連絡所の役割を果たした琉球館（正式名称：柔遠駅）を皮切りに、琉球墓園、鳳洋琉球金將軍廟、冊封使謝傑墓、蔡夫人廟など、琉球にゆかりのある旧跡 9か所を巡り、航海の目印である五虎門を仰ぎ遊覧船で閩江を遡上する…はずだった。

ところが、深夜に到着した迎えのバスの中で、行程の変更を告げられた。正午以降の運航は中止の通達があったといい、使節が朝貢の大役を果たし閩江を下る行程から出発することになった。一同、映画のロケ隊に参加したつもりで、逆行程を念頭に乗船した。高層ビル群が林立する兩岸はあまりにも発展し、昔日に思いを馳せるには落差が大きかった。

昼食後に 9箇所旧跡を巡るのはかなりの過密日程だ。数分しか滞在できなかったところもあり、由来が分かるまでには至らない箇所もあった。学校の敷地内でしっかり保

存されている旧跡もあれば、開発の波に押され再訪時には商業ビルが建ち、跡形もなくなっていそうな旧跡もあった。

7番目に訪れた鳳洋琉球金將軍廟は、遭難して漂着した金將軍を祀ったもので、文化大革命時に破壊されたものの、1975年に再建されたという。南京錠を開けて廟内を見せてもらった。人形劇を奉納する舞台が設えられているが、いつまで行われたのかは聞きそびれた。きらびやかな神衣をまとった神像の保存状態も気になるが、建物は老朽化が目立ち補修が急がれる。クラウドファンディングの案件になるには十分だ。

福建師範大学の敷地内の細い路地で渋滞し、琉球墓園を訪れた頃には日も落ち始めていた。福州市内に琉球人墓は数箇所あるといわれ、562人が今も骨を埋めている。墓園には一部移築を含め9基あり、大半は使節及び随行人員として客死した人々が眠っている。一同が献花台で焼香し、第15代王府おもろ継承者の安仁屋眞昭氏が装束姿で御霊を鎮めるおもろを奉納した。参加者には尚家や久米三十六姓の末裔がいて、沖縄から持参した独自の線香や泡盛を供え、念願かなったという面持ちで手を合わせていた。

3日目は媽祖教の聖地、湄洲島を訪ねた後、一部は福州市外事弁公室の歓迎式、副市長主催の晩餐会に招かれた。修行僧が塀を飛び越えてでも食べに来たという由来を持つ、乾物を煮込んだ高級料理「仏跳牆」などを頂いた後、忌憚のない意見交換が交わされた。

「閩琉友好」は脱清人の遺志

前日見学した琉球館はかつて、ちょんまげの琉球人やみこしを担ぐ琉球人のイラストが展示されたこともあるように、考証には課題があった。今回、そこは改善されていたものの、新たな問題が浮上した。施設入り口に立つ石碑が「中日友好」だったのを一同が問題視したのだ。「琉球処分」と呼ばれる日本への併合に抗議し、「脱清人」と呼ばれる人々が清朝への嘆願書を携え渡航した歴史があるからだ。

「国難を訴え命がけで渡航してきたのに、日本の一部と見なされては、先祖も悔しい思いだろう。『閩琉友好』に書き換えてほしい」（脱清人の末裔）。外事弁公室の担当者はこう釈明した。「以前、北京大使館と広州領事館から職員が来て『日中』『日本国沖縄県』とするように指導して帰りました。新聞社も数社来ました」。どうやら日本政府の圧力があつたようだ。中国との独自の歴史を有すればこそ「閩琉」を主張する道理である。

乗り継ぎ便による3泊4日の行程は、高齢者には過酷だったが、全員無事に帰国の途に就くことができた。尚家の流れを汲む尚勇団長は解団の挨拶でこう述べた。「孫の世代は根拠のないネット情報に振り回され、中国は嫌いだと言うが、その孫の世代に伝えなければならない。中国は、祖先が眠る墓を何百年も守りぬいてくれた。その中国と長年交流のある琉球は、嫌わずに仲良くすべきだ」と。確かに、沖縄を侵略したのは大和（薩摩藩）とアメリカであり、中国でないことは歴史が証明している。

（ともよせ・さだまる：1960年生まれ 沖縄県出身。週刊誌校閲の傍らライター活動を続け、主にサンデー毎日、沖縄タイムス、琉球新報などに寄稿 4月より東アジア共同体研究所 琉球・沖縄センター事務局長。著書に『雲南哀楽紀行』（愛育社）など）

日本方正総商会設立さる

～活躍が期待される方正出身の起業家たち～

大類 善啓

在日華僑の一割近くを占める方正出身者

ハルビン市郊外の方正県に建立されている日本人公墓の存在が示すように、方正と日本との結びつきは大きい。日本には、残留婦人や残留孤児だった人々の縁戚なども多く、日本に住む方正出身者は現在、6万人になるという。

「華僑といえば昔は福建省や広東省からが多かったが、最近は黒竜江出身が増えて、福建省や広東省より多くなったようだ」と、数年前だったか老華僑から聞いた。黒竜江省と言っても圧倒的に方正県出身が多いらしい。そういう事はある程度知ってはいたが、日本にいる華僑80万人の8%ほど、1割近くが方正出身者だという事実を改めて聞くと、やはり驚く。その中には起業する人々も多く、昨年11月東京で、方正出身者の起業家が250人ほど集まり一般社団法人日本方正総商会を設立。企業の発展を促進し、方正の文化を発揚して社会的な影響力を拡大したいという。その設立披露宴がこの4月12日（木）、東京のホテル椿山荘東京プラザ4階の「ジュピター」の間で開催された。

張建華方正県長も来日

午後7時からの披露宴には私も招待され、理事の藤原知秋とともに出席した。当日は、方正県から張建華・県知事、方正県招商局・陸海濱局長、ハルビン市投資促進局・趙剛副局長、黄力新・方正県外事弁公室主任、劉文海・方正県事務室主任らがわざわざ中国から来日され出席された。

また中国大使館からは領事部の梁哲明二等書記官、また奥野総一郎衆議院議員の政策担当秘書の中澤健氏、外務省アジア大洋州局中国モンゴル第二課の蔵田大輔事務官の他、在日中国人や日本各界から総勢200人の人たちが祝宴に駆けつけた。

多士済々の顔ぶれで賑わう

披露宴の第一部は、スライドを使って方正の歴史や文化の紹介である。その後の第二部では武田正志会長の挨拶、張建華・県知事の祝辞の後、茅原占三・執行会長からは総商会の設立経緯や会員の現況などの説明があった。茅原氏の説明によれば千葉、埼玉、東海、大阪など地方分会も設立されており、今後の方正出身者の活躍が期待できそうである。

また公益社団法人日中友好協会の岡崎温理事長、宮嶋剛事務局長も出席され、岡崎氏は「方正県の歴史、文化などの実情を聞き、こんな素晴らしいところだとは知らなかった。認識を新たにしたい」と挨拶し総商会の発足を祝した。その後、総商会の邵旭宇・幹事長の司会進行で、故郷の歌の披露などもあり、大いに歓談。午後9時半過ぎ、盛会のうちに散会した。

(おおい・よしひろ：本会事務局長、著書に『ある華僑の戦後日中関係史』（明石書店）共著に『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』など)

日本方正総商会設立披露宴写真集



挨拶する総商会の武田会長



祝辞を述べる張建華・方正県長



総商会の現況を説明する茅原執行会長



ハルピン市方正県と日本との
ビジネス協定に調印



懇親会開会のテープカット



第二部で司会をした邵旭宇・幹事長

一般社团法人日本方正总商会大阪分会正式揭牌成立



(接上页) 张建华在发言中还对方正乡友多年来通过各种渠道关心、关爱家乡的发展和变化,通过各个方面支持家乡的经济和社会发展所做出的重要贡献表示感谢。他说,此次一般社团法人日本方正总商会和大阪等地六个分会的成立,翻开了方正人在日本新的历史一页,也标志着将在新的起点开辟方正人在日本更美好的明天。他同时介绍说,中国中央政府已经明确提出了振兴乡村战略的实施和鼓励在外的能人回乡创业,为大家

开辟了回乡创业的广阔空间,“我希望方正的乡友继续发扬过去精诚团结、艰苦奋斗、诚信友谊的理念,继续在日本创造更辉煌的业绩!同时也欢迎大家通过各种渠道参与家乡建设,回乡创业!方正县委、县政府将会为大家创造最优惠的政策、最良好的发展环境和最优质的服务,助力大家在二次创业中事业更上一层楼!”

中国驻大阪副领事刘磊也应邀致辞。他首先代表中国驻大阪总领事馆对一般社团法人日本方正总商会及大阪分会的成立表示祝贺,并对以张建华为团长的方正县赴日考察团一行表示欢迎。刘磊副领事介绍说,根据日本外务省的数据,截至2017年在日华侨华人总人数已经突破90万人,其中6万来自方正县。在“春节祭”、“中秋明月节”等关西地区重要的侨界活动中,都能看到方正人奔走忙碌的身影。方正人是在日华侨华人群体重要的组成部分,也是关西地区侨界繁荣发展重要的有生力量。许多方正侨胞凭借吃苦耐劳的优良美德,白手起家,开创了自己的事业,取得了一定成绩,成为了在日方正人的榜样。

刘磊副领事表示:随着十九大的召开,中国面貌一新。今年又是中日和平友好条约缔结40周年,是中国改革开放40周年,是中日民间经贸及人文交流迎来的机遇之年。他希望在日方正人发扬龙江人忠厚正直、朴实诚恳、热情勤奋、勇敢智慧的优良传统,“方方正正”做人,“踏踏实实”做事,积极融入当地社会;也希望日本方正总商会大阪分会秉承创会宗旨,团结凝聚侨胞力量,为维护侨胞权益、促进侨胞事业发展、推动中日各领域交流与合作,发挥积极的桥梁纽带作用。

随后,一般社团法人日本方正总商会大阪分会会长陈志良、日本方正总商会会长牛



志权也先后致辞。陈志良分会会长介绍说,一般社团法人日本方正总商会大阪分会是在中国驻大阪总领事馆和方正县委、县政府以及日本方正总商会的领导、关心和支持下,经过大阪分会全体理事几个月的精心筹备得以成功组建的,是方正县在大阪经商、务工人员合法的社团组织,是大阪方正人海外共同的家园。他本人很荣幸担任第一届大阪分会会长。理事成员现有56位,百分之九十以上是企业家代表。

方正县招商局局长陆海滨专门对方正县的招商情况做了推介,并与日本有关方面签署了合作协议。

在嘉宾致辞和招商推介活动结束后,伴随着雄狮狂舞,由陈志良正式宣布一般社团法人日本方正总商会大阪分会正式成立!并由现场重要嘉宾共同举行了揭牌剪彩仪式。

当晚还举办了庆祝酒会,并由专业人士进行了民乐演出。参加成立大会和推介会的在日方正侨胞纷纷举杯,为在大阪有了方正人的家园而兴奋不已!



ちろ特報部

満智子さんは茂子さんから、事件そのものの話を聞いた記憶がない。

終戦間際、茂子さんは伊勢で教職を得た後、一九五二年、地元の東京に戻り、檜原村の小学校に勤務。乳がんを患って、六八年に五十二歳で亡くなった。

この間、銃弾の一部は茂子さんの体内に残ったまま。そのことを満智子さんに「健診」にきよっとさされる」と語る時には事件に触れた。だが、満智子さんは傷痕の痛みを訴える姿も見たことがないという。

「生々しすぎて話せなかったでしょう。私にも決して弱いところを見せなかった」

父・良二さんについて話してくれた記憶もないが、結婚前に書いていた父の日記帳が残っている。日記の内容は、レコードを買った話などたわいがないが、事件を示すように銃弾が貫通した痕がある。「これが父の形見。父を実感できるもの」と、タオルにくるんで大切に保管している。

満智子さんは建築事務所などで働いた後、結婚して息子を出産。約四十年前に飲食店を開いた。この間、通州事件のことが頭を離れず、新聞を読んでも「通州事件」の文字を探してしまう。事件を知る人も少な

「祖父の死 利用しないで」

く、寂しい思いをしてきた。

一年ほど前、新聞記事で通州事件の記録が、国連教育科学文化機関(ユネスコ)の記憶遺産に登録申請されたことを知った。申請を支援する保守系団体に連絡を取ると、集会で話をする機会を与えられた。しかし、遺体の状況など事件の残酷性を強調する雰囲気には違和感を覚えた。

満智子さんは「満州に渡った当事者たちは純粹な気持ちだったと思うが、結果的には中国を侵略したことになる。純粹な気持ちで純粹なまま受け取られたか、というところがもしれない。私は事実を事実として

「真相」知った 嶽村久美子さん

だけ知ってもらいたい。それ以上でも、それ以下でもないんです」と訴える。

一方、「こちら特報部」は、祖父の死が通州事件によるものと、つい最近知った元幼稚園教諭の嶽村久美子さん(今も福岡市)からも話を聞くことができた。

嶽村さんの母の熊本県の実家では、祖父・甲斐厚さんが軍服で白馬にまたがった写真があり、「立派な死を遂げた」と聞かされて育った。だが、一年ほど前、通州事件について書かれた本を読み、祖父の死の真相を知った。

当時、厚さんは陸軍の特務機関の少佐。新聞は「甲斐少佐の居室に入れば少佐

が軍刀と拳銃を両手に持ち鉢巻姿のまま壮烈な戦死を遂げていた」(三十七年八月五日付東京朝日新聞)と伝えていた。親戚の集まりで話題に上ることはなかったが、これが真実だった。

「本当のことを知りた」と嶽村さんは防衛省図書館や靖国神社にも行った。靖国神社には、厚さん直筆の短歌があった。「死場所を得たる君なり山桜花いさきよく散れとこそ思へ」などの三句。「死が美化されている」と感じた。

事件当時九歳だった母(今は現在、福岡市内で一人暮らし。あらためて事件について母に尋ねたが、父を亡くした時の気持ちなどは語らなかった。「天皇陛下のために亡くなったとして、自分なりに解決して生きてきたのだろう。死後、特進で中佐になったことが影響したかもしれない」

被害者の一人として当時、英雄視された。ご家族にとっては亡くなられたことはショックだった半面、軍人の身内として誇らしさもあったのではないかと。ただ戦後、日本軍の侵略性が指摘され、家族が発言することには、はばかれるようになったのでは。事件発生から八十年、家族が語れるようになったのは、この事件が歴史になりつつあることを示している」と話す。

嶽村さんは、中国人の残酷性をあおり立てる右派の言説に眉をひそめる。

「祖父は『肥後の甲斐ここにあり』と勇敢に叫びながら亡くなったというが、妻や子どもを思って亡くなったのではないでしょう。天皇の名の下に命を奪われ、今度は中国たまたきに利用されることは、祖父の死を踏みにじるものだと思います」



祖父甲斐厚さんについて語る嶽村久美子さん(福岡市)

通州事件 1937年7月29日未明、日本のかいらい政権だった冀東防共自治政府が治めていた通州で、冀東政権の治安維持部隊である中国人の保安隊が反乱。日本軍通州

守備隊の動きを封じた上で、居留民の日本人と朝鮮人を次々と殺害した。在天津日本総領事館北平警察署通州分署の調査では、亡くなった居留民は日本人114人、朝鮮人111人だった。

バックグラウンド

通州事件の遺族の証言を取り上げるのは三度目だが、悲しみを押し殺して語る姿に襟を正さずにはいられない。事件の悲惨さをいくら強調しようが、戦中の日本軍の残酷行為と相殺はできない。私たちがすべきなのは、遺族の切実な証言から、反戦平和につながるヒントを探ることだ。(典)

2017.12.3

「通州事件」遺族の思い

日中戦争の発端となった1937年の盧溝橋事件から約3週間後、中国・北京郊外の通州で多数の日本人と朝鮮人が中国人部隊に殺害された「通州事件」。日本人の反中国感情をおおりに、戦争支持を決定づけた事件とされる。だが、「こちら特報部」でこれまで2度にわたって紹介してきた遺族らは、親族を殺害された恨みよりも「戦争の悪」を強く訴えた。今回新たに事件当時、母親の胎内にいた女性が取材に応じた。事件が頭から離れなかった女性の思いとは一。(佐藤大)



① 出産後に再会した浜口茂子さんと満智子さん(右側)、安田正子さんと美智子さん(左側)の母娘=4人の背後に立つ女性が誰かは不明
② 生前の浜口良二さん
(いずれも加納満智子さん提供)



「私の中では通州がいつも『同居』していました。東京都練馬区で飲食店を営む加納満智子さん(左)は落ち着いた口調で語り始めた。

事件後に生まれた満智子さんに、事件についての直接の記憶はない。ただ、母・浜口茂子さんは生前、私家本に事件前後の経緯を詳細に書き残していた。

父・浜口良二さんは「満州棉花協会」から「通州植

「事実だけ知ってほしい」



棉指導所」に派遣された棉花栽培の指導者。優良品種を増殖する研究に従事しており、農民指導のため、事件の約一カ月前に奉天(瀋陽)から通州入りした。前年に結婚したばかりの茂子さんは妊娠していた。

通州の日本人は事件前から、不穏な空気を感ず取っていた。事件前夜、茂子さんは冀東政府の一連の施設がある通州城内の「安田公館」と呼ばれる官舎と一緒に身を寄せていた。一緒にいたのは良二さんの同僚の安田秀一さんと臨月の妻・正子さんら日本人十人。良二さんは宿直で、少し離れた政府庁舎内にいた。

七月二十九日午前四時ごろ、突然、銃声が鳴り響い

両親とも被弾 加納満智子さん

た。茂子さんらは応接室に身を隠したが、保安隊が押し入って銃を乱射した。相次いで銃弾に倒れる中、茂子さんは弾を背中を受け、正子さんも弾が下腹部から足を貫通して失神した。茂子さんはかすむ意識の中、腹を蹴られた気がするが、二人とも死んだと思っただか、そのまま立ち去った。

十人中八人が死亡。生き残った茂子さんと正子さんは意識を取り戻し、銃撃によるけがと身重の中、窓を乗り越えて建物の外に出て、必死で飲み物や食べ物を探して命をつないだ。

三十一日になり、救援にきた日本軍に助けられた。良二さんは庁舎内で亡くなっていたことを知る。享年二十八歳。眉間に銃弾を受け、「文芸春秋」を脇に抱えていたという。遺髪を受け取った時のことを「あふれる涙をとめるすべもなく、私は声を忍んで、思いつきり泣いたのでございませ。しかし、取り乱しても笑いになるようなことはいたしませんでした」とつぶづっている。

茂子さんと正子さんはその後、天津の病院に運ばれ、正子さんはまもなく美智子さんを出産。茂子さんは背中への傷口が化膿し、重篤な状態だったが、治療を受けた後、良二さんの実家の三重県伊勢市に戻った。

その約三カ月後に出産。良二さんがあらかじめ決め、満州の「満」から取った「満智子」と名付けられ、「良二の忘れ形見」と大事に育てられた。

満智子さんが一歳ごろ、奇跡の生還を果たした二組の母子が再会した。その時の写真からは、少し前に凄惨な事件に巻き込まれたという面影は読み取れない。

銃弾でくりぬかれた、父良二さんの日記帳を大事そうに開く加納満智子さん(東京都練馬区で

過ちを繰り返さない日本に 藤原敏子

大類 善啓

今年1月に入って藤原敏子さんから手紙（1月10付消印）をもらった。藤原さんは、岩手県北上市に在住、藤原長作さんの長男の夫人である。本誌の読者ならご存じだと思うが、藤原長作さんは方正県に住み着き、米作りを指導し、黒竜江省を米作中国一に仕上げ、多大な貢献をされた方である。

以前にも2～3回、敏子さんからお手紙をもらったことはあるが今回のお手紙は、会報25号へのお礼である。拓大の岡田実先生が藤原長作さんを取り上げられたことに、とても感謝され、「25号は我が家の家宝にしたいと思います」と綴られている。

2003年に『風雪に耐えた中国の日本人公墓—ハルビン市方正県物語』を牧野八郎さんたちと榎東洋医学舎から出した時、私も「水稻王 藤原長作物語 中国の大地に根づいた日中友好の絆」というタイトルで11頁に亘って書いたことがあった。敏子さんは今回の手紙で、その時は「我が家にはとってとても大切な本と思うだけで家宝と気付かずいました」と書いている。

敏子さんは1980年代の後半に方正県政府に招待されて二度ほど方正県を訪れている。「私たち家族は後にも先にも海外旅行は二度の方正県のみです。いくら義父の功績を聞きましても長作は頑固で変わり者の代名詞、これだけの業績を残していたとは周辺の誰もが信じられない事でした」と記されている。

この手紙とともに、敏子さんが岩手日報にかつて（2015年8月）に投稿され採用された記事のコピーが同封されていたので以下に掲載する。

(27.8.22)
藤原 敏子 68歳 県に足を運んでください
(北上市 パート社員) い。日本人墓地があり
◇私の記憶が間違います。当時の毛沢東主
でなければ、安倍首相 席と周恩来首相が「戦
は「美しい日本をつく 争は一部の政治家の誤
りです」と宣言されま った考えによるもの
した。安全保障関連法 で、日本人も被害者で
案を成立させること す」として、日本人墓
が、美しい日本づくり 地の建立を許された墓
になるのでしょうか。 所です。
私の義父は、藤原長 そこには5千人以上
作と言います。稲作日 の魂が眠っています。
本一となった後に中国 なんと戦争は悲惨なも
に渡り、黒竜江省で稲 ののでしょうか。戦後70
作指導をしました。な 年の今も管理維持され
ぜか。償いのためでし ています。一国の首相
た。 はお礼の言葉を言わな
一度、黒竜江省方正 ければなりません。

お聞きします。これ
以上若者を減少させる
つもりですか。誰が税
金を納めますか。
二度と同じ過ちを繰
り返すことのないよう
に、若者たちが希望を
もって生きていける日
本にしてください。
総理の総理による総
理のための政治になり
ませんことを、心を込
めてお願いします。

ほうまさ
方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

——「方正友好交流の会」へのお誘い——

1945年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府によって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ4500人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。(黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります)

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、民衆レベルでの国際的な友愛精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は1993年に設立され、2005年6月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員 一口 1,000円 団体・法人会員 一口 10,000円

(口数は最低一口、上限はありません)

方正友好交流の会

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 (社) 日中科学技術文化センター内

電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400 E-mail : ohruai@jcst.or.jp

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス : <http://www.houmasa.com/>

《報告》

ありがとうございました！

前号の会報 25 号入稿後、2017 年 12 月 17 日以降にカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受取った順に記載しました。2018 年 4 月 27 日現在)

滝永登 毛利悦子 村田吉隆 遠藤滋 藤原作弥 小玉正憲 広田彰夫 さいたま市大宮日中友好協会事務局 酒井武史 高木昂 田中佐二郎 佐藤千栄子 榎戸吉定 小出公司 天竺桂尚穂 NPO 法人二つの観音様を考える会 山内良子 吉川孝人 近寅彦 寺本康俊 依田高明 篠田欽次 山川梅子 肥後茂樹 柳澤永一 佐藤守男 由井格 新宅久夫 是洞三栄子 矢吹晋 山田敬三 山下美子 佐藤喜作 貞平浩 NPO 法人やまなみ 篠原淳子 高田京子 瀬部明子 上西隆全 清水孝一 石井敏夫 小柳保証・公代 中野圭子 篠原国雄 岩噌弘三 下山田誠子 山田弘子 阿久津国秀 山根理一 石原健一 伊藤真理子 武吉次朗 斉藤剛 山口栄一 石橋辰巳 中嶋定和 大里浩秋 奥田俊夫 飯白栄助 木村護郎クリストフ 山口真 亀山英雄 土川克広 佐藤すみ江 芦川荘一 網代正孝 鶴沢弘 斎藤敏文 中澤道保 末広一郎 村田和代 小駒葉子 芹澤昇雄 木戸富美江 田沢仁 大島満吉 野中西夫 キクチカズヤ 野村正彦 牧野八郎 土橋貞夫 小岩盛廣 窪田かづよ 小柴玲子 近藤耀子 及川淳子 田中正昭 村田忠禧 光川澄子 平良長政 池宮城洋 前川孝一 可児力一郎 中井詔太郎 宮腰直子 藪田喜山中村久美子 石尾喜代子 高橋かよ子 高橋紀代子 中村ふじゑ 上野京 岩間孝夫 岩崎スミ 伊原忠・泰子 長谷部郁子 星野敏康 藤川琢馬 石田和久 内山則男 久保和男 小早川のぞみ 米濱泰英 團野廣一 高橋守男 杉田春恵 鎌田アサ 西岡秀子 野崎朋子 大津弘子 小倉光雄 原澤俊 黒岩満喜 瀧亀久男 山川禎一 崎山ひろみ 宮本邦彦 高木凉子 皆川純麿 江田洋一 新田百合子 小関光二 照山真木子 今村隆一 島辰夫 南村豊實 藤勝徳 根田春子 上条八郎 藤原敏子 富永孝子 井上定彦 中島紀子 湯川誼 坊野正弘 小林浄子 石金楷 深山信雄 藤本善光 樋口貴教 田井光枝 鈴木幸子 深野正昭 馬場永子 新谷陽子 山本武 高橋健男 金成敬子 篠原孝 澤岡泰子 名取敬和 吉崎聆子 富田恵子 小松碧 師岡武男 望月信隆 宗重勇 清嶋一順 丸山竹嘉 川北至 高橋幸喜 岡百合子 山本義輝 中崎一通 横井幸夫 中川信幸 貞平浩 山極晃 北川進 瀬戸口律子 城谷稔 宮城恭子 竹内功 渡辺眞知子 畑修三 阿石定子 中澤洋 中村寛三 星野郁夫 戸田和歌 藤村光子 掛谷敏男 石田護 野沢淑子 山内るり 竹之内信一 南雲英雄 西暢子 谷口善助 齊藤忠雄 東宮春生

.....

書籍案内を兼ねた編集後記 大類善啓

『満州天理村「^{ふるさと}生琉里」の記録 天理教と七三一部隊』

エイミー・ツジモト著

かつて中国東北地方のある町を歩いていた時、本願寺系の寺院の跡地だったという場所に出会った。そうか、日本の宗教教団は旧満洲の日本人たちへの布教目的に、この大陸ま

で来たのだ、とその時改めて思った。その事実に驚いたわけではない。しかし、本書が明らかにしたように、悪名高い関東軍の 731 部隊に天理教団が協力していたという事実には驚いた。

明治初めに勃興した新興宗教の代表的な教祖たち、天理教の教祖である中山みきも大本教の教祖、出口なおも貧しい生活を強いられる時代に抗議するかのようにお筆先を著した。それは精神分析の創始者であるフロイド博士いうところの自動書記現象によって神がかりになって書き記したものだ。

人間はみんな平等なのだ、と説く彼女たちの教えは、帝国主義的な天皇制日本国家に受け入れられるはずはなく、天理教は教えを一部、政府に合わせて改編し、大本教は徹底的に弾圧された。大本の弾圧された要因は、革新将校までも教団に魅せられていった点などさまざまな要因があったろう。今それを述べる余地はない。

天理村として満洲に入った信者の一人の回想を取材する過程で出てきたのはこういう話だ。「ある日のこと、関東軍からハツカネズミを飼育せよという依頼が天理村の小学校に舞い込んだ。小遣い目当てと“お国のため”もあり、子どもたちは、競って飼育に励んだ。自分たちが育てたハツカネズミが大量殺戮兵器の媒介となり多くの人々の命を奪う日がくるなど、思ってもみなかった」

中山みきの教えに背いても国策に殉じる組織、そして「いつの時代にも宗教さらには宗教を求める人たちの「心」が、いかに国策に殉じやすいものかという危険性」を問いかけたという著者はアメリカ・ワシントン州出身のジャーナリスト。現在、京都市在住。著書に『漂流するトモダチ——アメリカの被ばく裁判』（朝日新聞出版）などがある。

(定価：本体 2000 円＋税、発行：えにし書房(株)、102—0074 東京都千代田区九段南 227 北の丸ビル 3 F、電話 03—6251—4369 FAX 03-6251-4379)

.....

前号は通常より製作費、発送費が大幅に上がったため、カンパの要請を強くアピールした故もあり、多くの方々からの支援を受けた。本当に感謝します。今号は、前号より頁数は少ないが力作揃いだと思う。寄稿していただいた方々には改めて御礼を申し上げたい。

イラクの人質になった長谷川さんの原稿は、日本の国家、政府の本質のようなものが、昔も今も変わらないものだとつくづくと思い、うんざりさせられる。

毎号、最後の原稿チェックには森一彦氏の協力があるが、彼は天安門事件の4年後に北京に駐在した。駐在仲間から、天安門事件の際、日本大使館は本当に頼りにならず、日本人の日本への帰国では日本の航空会社が懸命に力を尽くしたと聞かされたという。

これからも旧満洲にとらわれず、本誌にふさわしいと思われるような内容なら、大歓迎である。「書くのは苦手だ」という方は多いが、編集人宛に手紙を書くように綴っていただき送っていただければと思う。

《表紙写真撮影：寺沢秀文》

『星火方正～燎原の火は方正から～』（第 26 号）2018 年 5 月 16 日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email：ohrui@jcst.or.jp

〒101—0052 東京都千代田区神田小川町 3—6 日本分譲住宅会館 4 F

(社)日中科学技術文化センター内 電話：03—3295—0411 FAX：03—3295—0400

郵便振替口座番号 00130—5—426643 加入者名 方正友好交流の会

